
SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS No.129 May 2012

新センター長から

地域研究のルネサンスに向けて

宇山智彦



1955年に官制化された北海道大学スラブ研究センターは、前身を含めれば約60年の歴史を誇りますが、ここ十数年の変化は特に大きなものと言えるでしょう。2000年に文学研究科内にスラブ社会文化論専修を開設したことによって、常時30人前後の大学院生を指導するようになったのに加え、プロジェクト関連の研究者や事務補佐員等が激増し、大所帯のセンターになりました。外国人研究者の滞在も増え、しかも単に海外の著名な研究者の高説を私たちが拝聴するというだけでなく、私たちが外国人研究者のキャリアアップをお手伝いする機会が多くなりました。センターのシンポジウムの報告集を外国で出版したり、センターの教員が外国でシンポジウムを開催したりすることも珍しくなくなりました。センターが世界的なスラブ・ユーラ

シア研究の拠点であるということ、今や、背伸びせずに言うことができます。

研究内容も変化しました。かつてのセンターは、地域的にはロシア、分野的には社会科学を中心とする研究機関というイメージがあり、中央アジア史研究者である私が1996年に着任した時には、マイナー意識を持たざるを得ませんでした。その後中央アジアを含む中央ユーラシア研究がセンターの柱の一つとして確立しただけでなく、各種の文化研究や文理連携的な研究を含め、研究アプローチも極めて多彩になりました。プロジェクト関連では、中国、インド、東南アジアなど、スラブ・ユーラシア（旧ソ連・東欧）以外の地域を専門とする研究者も多く勤務し、センターの活動に大きく貢献しています。

しかし近い将来、スラブ研究センターは転機を迎えることが予想されます。その最大の理由は、ここ数年のセンターの繁栄を支えてきた大プロジェクトのうち、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」が2012年度、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」が2013年度をもって終了することです。当面の課題は、これらのプロジェクトの成果を有意義にまとめ上げ公表すること、終了後の研究資金の方策を考えることですが、資金の問題以

上に本質的に重要なのは、センターの中長期的な活動の方向性を決めていくことだと思われ
ます。約5年のプロジェクトのために全力疾走し、それが終わるとテーマを変え、ねじを巻
き直してまた走り出すということを繰り返すのでは、いくらセンターが精力的な研究者を集
めていても、息切れしてしまいます。スラブ・ユーラシアに隣接する諸地域の研究、その他
の地域との比較研究、境界研究といった、21世紀に入ってセンターが新しく取り組んだ研究
を無理なく継続するにはどうすればよいか、考えなければなりません。同時に、言うまでも
なく、スラブ・ユーラシア地域に関する基礎研究、センター外の研究者コミュニティとの関
係の維持・強化、若手研究者の育成といった地道な仕事にも、引き続き取り組まなければな
りません。

また、スラブ研究センターがパワーアップしてきた反面、全国的には、大学教員ポストの
削減の影響もあって、スラブ・ユーラシア研究、さらには地域研究全般が非常に元気だと言
える状況ではありません（センターでも専任教員数は減っています）。考えてみれば不思議な
ことです。グローバル化によって、一つの地域で起きたことが世界に波及しやすくなり、自
国や「先進国」群の中に閉じこもった思考法では理解できない事象が増えているのに、グロー
バル化＝世界の均質化という一面的な見方のために、ディシプリン系の学問をやっていれば
世界が分かるという地域研究軽視の雰囲気が強まっているように見えます。この20年余り、
冷戦終結、ソ連崩壊、中東で繰り返される危機や政治変革、中国・インドの急成長などで短
期的に地域研究が注目されても、地域の状況を長期的に観察し、他地域と比較し、ディシプ
リン系の学問との間で相互にフィードバックすることによって、学問のあり方や世界認識を
どう変えていけるかについては、十分考察が深められてきたとは言えません。欧米中心の世
界秩序が揺らぎつつある今こそ、地域研究のルネサンスが必要ではないでしょうか。センター
が、スラブ・ユーラシア地域の現状や歴史についての情報・知見を発信するとともに、他の
地域の研究との連携を深めることによって、それを担う一翼となれるなら幸いです。

このような大変な時期に、若輩で非力な私がセンター長を拝命することには、かなりの不
安があります。しかし、経験豊富な先輩方の協力を得てセンターの発展に力を尽くすとともに、
文系の学問の究極的な目的が人間と世界の探求であることを忘れず、ただひたすら忙しい職
場というだけではない、思索の森、談論の場としての雰囲気作りに努めたいと考えています。
諸方面の皆様のご指導・ご協力をお願いする次第です。

新学術領域研究

◆ 第7回国際シンポジウム「帝国から地域大国へ、国家と非国家の間で」予告 ◆

本新学術領域研究の英語での最後の大会となる第7回国際シンポジウム“From
Empire to Regional Power, between State and Non-state”（帝国から地域大国へ、国家と非国
家の間で）を、2012年7月4～6日に開催します。第2班（内政）、第5班（社会）の協力
で予定されているセッションは次の通りです。[松里]

※なお、7月7日（土）午後には、新学術領域研究第6回全体集会在が予定されています。

From Empire to Regional Power, between State and Non-state

会場：北海道大学スラブ研究センター 4階大会議室

7月4日(水)

International Workshop of Young Scholars

Keiji Sato, Hokkaido University

Dareg Zabarah, Humboldt University "Autocephaly: A Delayed Transition from Empire to National State"

Nikola Mirilovic, University of Central Florida

Commemorative Lecture

Theodore Weeks, Southern Illinois University "City, Cultures, Empire: Vilnius in the Russian Empire and USSR"

7月5日(木)

Opening Speeches

Session I: Empires and Political Geography

司会: **Ozan Arslan**, Izmir University of Economics

報告者: Empires and Seas/Oceans: **Charles King**, Georgetown University "Can Seas Have Histories?"

Empires and Steppe: **Jin Noda**, Waseda University

Empires and Mountains: **Moshe Gammer**, Tel Aviv University "Mountains of Copper, Men of Steel: Russia confronting the Mountains"

Session II: Religious Politics and Transnationalism

司会: **Kimitaka Matsuzato**, Hokkaido University

報告者: **Norihiro Naganawa**, Hokkaido University "Drawing Russia as a Muslim Power? The Hajj from Tatarstan and Daghestan in the Post-Soviet Era"

Sana Haroon, Institute of Business Administration, Karachi, Pakistan "Muslim Transnationalism in the Twentieth Century: India, Pakistan and Afghanistan"

Dumitru Cotelea, Babes-Bolyai University, Romania "The Issue of the Russian Canonical Territory between Ecclesiology and Geopolitics"

討論者: **So Yamane**, Osaka University

Session III: Conflicts Spanning the Regional Powers' Peripheries and "Near Abroad"

司会: **Keiji Sato**, Hokkaido University

報告者: The Caucasia: **Arsene Saparov**, Michigan University "Arbitrary Borders? The Bolsheviks and the Making of Borders in the South Caucasus in the 1920s"

Xinjiang: **David Brophy**, Australian National University "Russian Muslim Writing on Xinjiang in the Pre-revolutionary Period"

India: **Kazuya Nakamizo**, Kyoto University "Peripheries Creating the 'Indian' Nation: The Border and Muslim Problems Revisited"

討論者: **Keiichi Kubo**, Waseda University

7月6日(金)

Session IV: Competitive Authoritarianism: Theoretical Challenges

報告者: **Barbara Junisbai**, Pitzer College "Unpacking the 'Competition': Variation in Political Opposition under Competitive (and Not-So-Competitive) Post-Soviet Authoritarianism"

Ayame Suzuki, Fukuoka Women's University "Strong Institutions and Weak Incumbents: Asian Competitive Authoritarianism as an Exception?"

Atsushi Ogushi, Osaka University of Economics and Law "Has Regional Politics Lost Meaning Under competitive Authoritarianism?: Russia and Ukraine"

Fumiki Tahara, University of Tokyo "Are There Differences between Competitive Authoritarianism and Democratic Clientelism? Questions from the Community Level"

討論者： **Atsushi Ishida**, University of Tokyo

Session V: Regime Change or Regime Dynamics?: Comparative Study of Backlashes

司会： **Yang Cheng**, East China Normal University

報告者： Georgia: **Cory Welt**, George Washington University “Institutional Reform and Single-Party Rule in Georgia”

Ukraine: **Olexy Haran**, Kievo-Mohyla Academy University “From the Orange Revolution to Russian Model of ‘Stability’?”

Kyrgyzstan: **Tomohiko Uyama**, Hokkaido University “Party Politics and Premier-Presidentialism in Kyrgyzstan after the Second Revolution: Order in Disorder”

討論者： **Hirotake Maeda**, Tokyo Metropolitan University

Session VI: Authoritarian Leaders and Discourses in Regional Powers

報告者： **Tang Liang**, Waseda University “One Party System’s Strategy for Survival: Promotion and Screening of Political Elites in China”

Gulnaz Sharafutdinova, Miami University “The Power of Ideas in Russia’s Real Politics”

※プログラムには、すでに確定済みのものだけ載せています。今後、随時補充して、スラブ研究センターのウェブサイト上で公開していきます。

◆ 「ユーラシアをめぐる日印対話Ⅱ：中国との関係に向けて」 開かれる ◆



“日印対話” のようす

は、日印のみならず中国、シンガポールからユーラシアの政治・国際関係・経済を専門とする研究者を迎え、ユーラシアにおける各国間関係の現状と将来のあり方について、率直な議論がおこなわれました。会議当日のプログラムは以下の通りです。[岩下]

センターでは2月27日に、スラブ研究センターと新学術領域研究の主催、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」の共催で、「ユーラシアをめぐる日印対話Ⅱ：中国との関係に向けて」がおこなわれました。本会議は、2011年3月にセンターで開かれたフォーラム「ユーラシアをめぐる日印対話」の続編にあたるもので、ロシアや中央アジアを含むユーラシア諸国についての様々な諸問題を、さらに深く掘り下げて議論することを目的として開かれました。会合で

ユーラシアをめぐる日印対話Ⅱ：中国との関係に向けて

セッション1：国際関係と政治的連携

司会： 石井明（東京大学）

報告： ナンダン・ウンニクリシュナン（インド・オブザーバーリサーチ基金）；K. ワリクー（ジャワハルラル・ネルー大学）；サンジェイ・パンデイ（ジャワハルラル・ネルー大学）；ルクマニ・グプタ（インド防衛研究所）；楊成（華東師範大学）；中居良文（学習院大学）；吉田修（広島大学）；兵頭慎治（防衛研究所）

セッション2：経済と地域秩序

司会： 安達祐子（上智大学）

報告：アルン・モハンティ（ジャワハルラル・ネルー大学、ユーラシア財団）；C. P. チャンドラセカル（ジャワハルラル・ネルー大学）；李澤建（東京大学ものづくり経営研究センター）；クリストファー・レン（安全保障開発政策研究所、スウェーデン）；田畑伸一郎（スラブ研究センター）；上垣彰（西南学院大学）；星野真（スラブ研究センター）

セッション3：戦略的展望と今後のダイナミズム（ラウンドテーブル）

司会：岩下明裕（スラブ研究センター）

報告：モニカ・チャンソリア（ランド戦争研究センター）；H. S. プラバカル（ジャワハルラル・ネルー大学）；趙干城（上海国際問題研究院）；小川伸一（立命館アジア太平洋大学）；長尾賢（学習院大学）

◆ 新学術領域研究会「生活空間、場の記憶、ジェンダー、探偵小説：ユーラシア比較文化の試み」開かれる ◆

3月3日、4日に新学術領域研究4班と6班の共催による研究会が開催されました。伝統医療、記念碑、フォークロアという生活空間をテーマにした第1セッション、西欧に由来する探偵小説ジャンルの受容を比較する第2セッション、世界遺産をめぐる文化政治を扱った第3セッション、社会・文化における女性性の問題を議論した第5セッションでは、新学術のプロジェクトが始まって以来これまでに培ってきたネットワークを活用して、ロシア、中国、インドの専門家をそろえることができました。その他、基盤研究B「近代以降のロシア文化における『南方』表象の総合的研究」（代表：中村唯史）との共催による第4セッション、第6班のこれまでの成果を報告する最終セッションがおこなわれました。50名近い出席者が集まり、活発な議論が展開されました。[越野]

◆ 新しいプロジェクト研究員の採用、およびプロジェクト研究員の今年度の勤務地 ◆

2012年1月より、第4班プロジェクト研究員の福田宏さんがスラブ研究センターの助教に就任したことにともなって、第4班プロジェクト研究員の公募がおこなわれました。応募者の中から厳正な審査の結果、高本康子さん〔前職は群馬大学非常勤講師〕が選ばれました。高本さんの研究テーマは近代における日本とチベットの関係史・交流史で、2012年3月1日から2013年3月31日まで北海道大学スラブ研究センターで勤務される予定です。

なお、今年度のプロジェクト研究員の勤務地は、以下の通りです。[後藤]

班名	研究者名	専門	勤務地
2班	三輪博樹	インド政治	北海道大学スラブ研究センター
3班	星野 真	中国経済・開発経済学	北海道大学スラブ研究センター、東京大学社会科学研究所、神戸大学経済経営研究所
4班	高本康子	比較文化論・日本近代史	北海道大学スラブ研究センター
5班	小松久恵	ヒンディー文学・インド文化論	大阪大学大学院言語文化研究科
6班	前田しほ	ロシア文学	北海道大学スラブ研究センター

◆ 比較地域大国論集第8号 ◆
『同盟と国境：地域大国を規定するもの』刊行

新学術領域研究が発行する研究報告集『比較地域大国論集』の第8号として、デイヴィッド・ウルフ編『同盟と国境：地域大国を規定するもの』が発行されました。本号は、昨年7月にスラブ研究センターでおこなわれた国際シンポジウム“Alliances and Borders in the Making

and Unmaking of Regional Powers” の報告要旨（日本語）と、スラブ研究センター共同研究員の鶴見太郎氏（日本学術振興会特別研究員 PD）によるシンポジウム全体の報告書が掲載されています。本書は新学術領域研究のウェブサイトからダウンロードできます。[後藤]



グローバルCOE

◆ 「第 12 回 Border Regions in Transition 国際学術会議（BRIT 2012）」 ◆
発表募集締め切られる

2012 年 11 月 13 日から 16 日までの 4 日間、福岡市と釜山市（韓国）において、第 12 回 Border Regions in Transition 国際学術会議（BRIT 2012）が開催されます。これは、北大グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」の一つの大きな成果として企画されているものであり、スラブ研究センター、九州大学韓国研究センターおよび九州大学大学院法学研究院、また東西大学校日本研究センター（韓国・釜山市）との共催でおこなわれます。

この会議は、国境の周辺地域におけるさまざまな問題を議論する国際的な学術会議であり、国境を隔てた 2 都市を移動しながら開催されるもので、今回、東アジアで初めて開催されることとなったものです。会議は、最初の 2 日間、福岡国際会議場で開催されたのち、参加者が高速フェリーで対馬に渡り現地調査をおこないます。その後、再び高速フェリーで釜山に渡り、最終日には釜山市にある東西大学校で最後のセッションが開催されます。

今回の会議では、「国境地域の声をどう生かすか：新たな世界秩序の模索」をメインテーマとして、国境で分断された境界地域に住む人々がその境界によってどのような影響を受けてきたのか、あるいは境界地域で発生する様々な問題の克服に彼らの「声」をどのように生かしていくべきか、という点について、政治、経済、文化、環境などさまざまな角度から論じることになっております。その中でも特に、福岡と釜山の広域経済交流の事例は、国境を越えた平和的な交流のひとつのモデルとして位置づけて、複数のセッションで紹介される予定となっています。

すでに 4 月 10 日をもって発表の募集は締め切られましたが、予想を大きく上回る 200 を超える応募がありました。現在は BRIT 幹部委員会によって応募のあった発表要旨をレビューする作業が進められており、5 月下旬にはすべての発表者およびパネルが確定する見込みとなっています。また、実行委員会によるロジ面での準備も着々と進んでおり、6 月初めにはすべてのスケジュールを決定して、参加者登録を開始する予定となっています。[花松]

◆ GCOE チーム、ABS ヒューストン年次大会に参加 ◆

2012 年 4 月 12 ～ 14 日、Association for Borderlands Studies（ABS）の年次大会がテキサス州ヒューストンで開催され、北大グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」にかかわる岩下拠点リーダーおよび地田、平山、花松、藤森各研究員、GCOE 支援により池畑周直美（北大公共政策大学院）、ポール・リチャードソン（学振外国人特別研究員）が参加しました。

本 GCOE プログラムは、世界の境界研究コミュニティの一角を占めることを目的としていることから、北米の境界研究の一大コミュニティである ABS との関係を重視しており、これまで多くユーラシア・アジア地域を専門とする研究者を派遣してきました。これは、境

界研究の先進学会でその手法を学ぶと同時に、北米研究者に我々の研究のプレゼンスを示し、市場を開拓する意味も持っています。

岩下拠点リーダーによる報告“Breaking the Curse of Japan’s Maritime Borders”は、大戦前の日本が巨大な海洋国家であり、今日も大きな排他的経済水域（EEZ）を保有していることを指摘し、東アジアの国際関係における海の境界の重要性を主張するものでした。その観点から、11月開催のBRIT XII 福岡・釜山大会の意義が説かれ、参加の呼びかけともなりました。



ヒューストンのダウンタウン

花松研究員の報告、“National, Regime and Knowledge Borders in Ecosystem Management: The Case of the Amur-Okhotsk Ecosystem”は、オホーツク海の海洋資源がアムール川全体の環境保全と関連していることを指摘するものでした。これは花松研究員がこれまで北大低温科学研究所（低温研）や総合地球環境学研究所（地球研）で研究してきたテーマで、オホーツク海の海洋資源に依存するロシア、日本と、依存度が低い影響を与えているアムール上流国（中国、モンゴル）間の調整の難しさが浮き彫りにされました。地田研究員の報告“Origins



平山陽洋の報告

of Transboundary Water-Energy Problems in Contemporary Central Asia”は、中央アジアにおける水利開発が、今日でもスターリンの「自然改造計画」の影響下にあることを歴史的に示すとともに、今日の中国の西部大開発政策により、中央アジア諸国間のみならず隣接諸国との間でも水資源を巡る争いが激化している現状が紹介されました。平山研究員による報告“The Governance of Borderlands in the Process of Nation-state Building during the War of Independence in Northern Vietnam”は今日のベ

トナムの領土変遷を歴史的に追いかけるものでした。特に、フランス統治下とその後の独立戦争による領土の流動化が、その後、地方における大動員政策や徴税において混乱の原因となったことが主張されました。藤森研究員による報告“Gaseous Borders: The Former Soviet Republics between Producer and Consumer”は、かつて存在したロシアとヨーロッパ市場間のガス販売価格差が、「地政学的な」友好価格に基づくというよりは、価格差を利用した再輸出ビジネスや、安いガスを利用した発電輸出の利益構造のために存在したことを主張するものでした。しかしながら、ロシアのWTO加盟やLNG普及により、こうした価格設定が困難になり、いずれは「市場価格化」される将来像が提示されました。

いずれの報告も、一次資料に基づくアジアやユーラシアを対象とした研究報告で、北米（米加国境、米墨国境）主体の ABS 会員にとってなじみがない地域です。しかし、北米との共通性や比較の観点が討論者や会場から指摘され、境界研究の後発である我々に多くの示唆を与えるものとなりました。特に現状分析については、河川の水資源問題、環境保全やニカ国にまたがるビジネス研究については、米墨境界地域と比較可能であり、こうした比較研究を通じて、ユーラシア・アジアの地域研究を世界のコミュニティに売り込むことが有効であることを感じさせられました。

年次大会中は、本プログラムが企画した DVD「知られざる南の国境」（HBC フレックス）もパネルのひとつとして上映されました。次期会長の Christine Brenner、副会長の Victor Konrad、Martin van der Velde を始め、Emmanuel Brunet-Jailly、Tony Payan、James Scott、Ilkka Liikanen、Kimberly Collins ら境界研究を主導する研究者が参加し、本作品を企画した岩下及び英語版の制作に協力した Paul Richardson とフィルムをめぐって討議をおこないました。境界地域の状況を収めたフィルムは参加者に深い印象を残したようで、今後、カナダ、米国、フィンランド、オランダなどでボーダースタディーズの教材として使われる予定です。昨年の ABS ソルトレイク大会での「知られざる北の国境：樺太と千島」からスタートしたこのフィルム・セッションですが、来年のデンバー大会では「先住民と国境」が上映されることになりそうです。[岩下・藤森]

研究の最前線

◆ ITP 英語ライティングセミナーと新学術第 5 班研究会 ◆

2 月 29 日～3 月 1 日に ITP 主催の英語論文執筆のための講習会を開催しました。今回は新学術領域研究第 5 班の協力を得て、スラブ研究者のみではなく、南アジア研究者にも参加の門戸を広げて、15 名の参加が得られました。参加者には未校正原稿を提出させたうえでの学術英語の執筆訓練をおこないました。2 日目の後半には二人の講師が分担して、マンツーマンで指導する時間を設けたのですが、参加者の多くは時間が過ぎても席を立とうとしないほどの熱意を示しました。また「How-to-get-published Seminar」と題して、初日には ITP 参加者で国際的査読誌に掲載を成功させた方々にその体験を話してもらい、2 日目は 3 名の経験豊かな外国人研究者から投稿に関するアドバイスを受けました。

3 月 2 日には関連企画として、新学術領域研究第 5 班「国家の輪郭と越境」主催の英語によるセミナーを開催しました。午前中は、インド洋に広がるハドラーミー・ディアスポラの研究で著名なエンセン・ホー教授（デューク大、米国）が“Muslim Diasporas and Western Empires: Precedents to Bin Ladin”と題する講義をしました。午後は、第 5 班の研究成果として、小松久恵さんが“To Be or Not to Be? Representations of ‘Homeland’ in Contemporary British Asian Writers”、長縄が“Khakimov of Arabia: Muslim Intermediaries for the Russian Empire and the USSR in the Hedjaz, 1890s-1930s”という報告をおこない、討論者のホー先生から大変刺激的かつチャレンジングなコメントを頂きました。今回は、スラブ研究センターの院生や研究員だけでなく、若いイスラーム、南アジア研究者も参加して議論を盛り立ててくれましたので、比較研究が生み出す知的エネルギーの大きさを改めて感じる事ができました。すべての参加者に御礼申し上げます。[長縄・越野]

◆ 「イディッシュ語の不定代名詞：スラヴ語派とゲルマン語派の間で」 ◆
ヨハン・ヴァン・デル・アウヴェラ教授の特別講演会

2012年4月19日(木)、スラブ研究センターにてアントワープ大学の言語学者ヨハン・ヴァン・デル・アウヴェラ教授の講演会がおこなわれました。先生は、ゲルマン諸語、言語類型論、地域言語学をご専門とされ、中でもムード、モダリティ、否定、不定といった文法的な意味論研究で世界的に著名な研究者です。先生が研究対象とする言語の種類が多さ、カバーする研究分野の広さ、そして業績としてのアウトプットが非常に多いことが特徴的ですが、中でも1990年代に活発



化したヨーロッパ言語圏研究では、相を表わす副詞やモダリティの研究で重要な貢献をされています。また、先生はスラヴ語学にも明るく、「ハリー・ポッター」のスラヴ諸語への翻訳をパラレルテキストとしたユニークなモダリティ研究もおありです。

ヴァン・デル・アウヴェラ先生は、家入葉子先生(京都大学、英語学)が日本学術振興会を通じて招聘され、今回は先生お二人のご厚意で札幌でもご講演いただけました。因みに、私がヴァン・デル・アウヴェラ先生に初めてお目にかかったのは、昨年7月末に大阪でおこなわれた国際歴史言語学会で、その時はあまりお話しませんでした。同年9月にルーヴェンでおこなわれたシンポジウムで再びお目にかかり、そこでベルント・ハイネ先生(ケルン大学)が改めてご紹介下さったのがきっかけとなり交流が始まり、その過程で来日を知らされたため、今回の講演会をお願いしたというわけです。

講演は、先生のご専門とスラヴ語学の双方に関わる内容でお願いしたところ、イディッシュ語の否定表現のパターンと不定代名詞の用法についてお話し下さいました。イディッシュ語はスラヴ語学ではあまり馴染みがありませんが(センターの10年来の友人であるポール・ウェクスラー先生は除く!)、音韻から文法構造までスラヴ諸語からの影響を強く受けた点で、ゲルマニストや言語接触研究者だけではなく、スラヴ語学者にとっても大変興味深い言語です。

ヴァン・デル・アウヴェラ先生は、平易な語り口で、多くの実例を用い、大変説得力のある説明をされるのが印象的でした。先生自身がお認めのように、今回の講演ではイディッシュ語およびスラヴ諸語の方言データや通時的データが十分に使えていないという弱点はありました。しかし、たとえそのデータがなくとも、言語類型論の広範な知識も踏まえて導き出された結論、すなわち上記のカテゴリーにおけるイディッシュ語が持つゲルマン語としての特殊性は、部分的にスラヴ諸語およびヘブライ語の影響のもとに生じたものであり、またイディッシュ語が純粋な「否定呼応」タイプの言語とは言えない(「否定呼応」の要素も持っている)という結論は、崩れないと思われま

講演会の参加者は比較的少人数でしたが、スラヴィストとゲルマニストが出席し、質疑応答ではドイツ語も飛び交うなど、センターでは珍しい講演会になりました。

本講演会の組織にあたり、ご協力下さった方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。[野町]

◆ 公開講座 ◆

ユーラシアの自然と環境は誰が守るのか 開講中

スラブ・ユーラシアの社会主義体制が崩壊し、新たな国境が生まれ、隣接地域との関係も大きく変容してきました。自然環境は本来、社会や政治の変化と無縁なはずですが、現実には大きな影響を受けています。ユーラシアにおける自然環境は、体制変動の結果として、今どうなっているのだろうか。誰がそこに目を向け、誰が自然環境を守っていくのか。

本講座では、西はヨーロッパのドナウ川水系から始まり、中央ユーラシアのアラル海やバルハシ湖に注ぐ内陸大河、そして東アジアの海につながるアムール川流域という、スラブ・ユーラシアの国際河川域を取り上げ、自然環境と社会変動ないし、国際関係との係わりを多面的に検討してまいります。

また本講座を通して、ユーラシアの東端に位置する日本、なかでもロシアや中国と一衣帯水の位置にある北海道が果たすべき役割を参加者の皆さんと共に考えたいと思います。[家田]

日 程		講 義 題 目	講 師
第1回	5月11日(金)	ドナウ中流域と環境汚染事故への対応	北海道大学スラブ研究センター 教授 家田 修
第2回	5月14日(月)	中央ユーラシアの人と自然の歴史：ユーラシア深奥部の眺め	総合地球環境学研究所 教授 窪田順平
第3回	5月18日(金)	ドナウ・デルタをめぐる国際法レジームのダイナミズム	北海道大学法学研究科 教授 児矢野マリ
第4回	5月21日(月)	中央アジア政治史と水	北海道大学スラブ研究センター 研究員 地田徹朗
第5回	5月25日(金)	松花江の汚染と東アジア水域	鳥取環境大学 准教授 相川 泰
第6回	5月28日(月)	アムール・オホーツク巨大魚付林と東アジア地域協力	北海道大学低温科学研究所 教授 白岩孝行
第7回	5月31日(木)	東アジアの環境リテラシー	日本大学 助教 山下哲平

◆ 若手ロシア人日本研究者グループの訪問 ◆

3月5日(月)ロシアの若手日本研究者の一行がセンターを訪れました。「多面的日本像、ロシア像」をテーマとした国際交流基金の招聘プログラムの一環で、訪問者はアレクサンドル・メシェリャコフロシア国立人文大学教授団長ほか8名。モスクワを始めオレンブルグ、ウランウデ、ウラジオストク、マガダンといった地域で日本学を学んでいる学生、院生、教員の混成チームで、専門テーマも現代政治、自殺の文化比較、アニメ論と多彩。センターでは全員がショートスピーチをして、楽しくまた有益な討論の時間を過ごしました。[望月]

◆ コラド氏の滞在 ◆

カリフォルニアのペパーダイン大学で教鞭をとるシャリル・コラド (Corrado, Sharyl) さんが日本学術振興会外国人特別研究員(欧米短期)事業の援助を得て、本年度5月から約8ヵ月間スラブ研究センターに滞ります。滞在中の研究テーマは、「『地の果て』：サハリン島とロシアの帝国イメージ」です。[松里]

◆ 専任セミナー ◆

ニュース前号以降、専任セミナーが以下のように開催されました。[家田]

2012年2月21日：望月哲男「3つのヴォルガ像：1856年の文人調査旅行から」
センター外コメンテータ：中村唯史（山形大学）

ペーパーの内容は、1850年代半ばにロシア海軍省を司るコンスタンチン・ニコラエヴィチ大公の企画で3名の文人がおこなったヴォルガ地域調査旅行の経緯と報告書類を、ヴォルガイメージの歴史的構築や変貌という視点から分析したもの。歴史と文学の両方にまたがる素材だけに、調査の歴史的背景や意味、文化・文学史的特徴や意味、個々の作家にとっての創作史的な意味などに関する質問が出され、議論が交わされました。

3月13日：ウルフ・ディビッド“Introduction to Special Issue on Soviet-Japanese Relations in the Cold War”

センター外コメンテータ：横手慎二（慶応大学）

今回の論文は今年の秋に刊行が予定されている *The Harvard Journal of Cold War Studies* の特集号「冷戦時代のソ日関係」の序説的論文です。ウルフ氏がここ数年取り組んでいるスターリン研究の成果と、横手氏をはじめとする共同研究者たちとの連携研究の成果が総合された内容となっており、日中関係、あるいは沖縄と北方領土との相関性にも言及がなされています。日ソ関係は冷戦史として語れるのかという問いかけが根底にはあるように思います。コメンテーターの横手慎二さんからは背景となる日ロ・日ソ関係史の説明や日本における研究成果などをもっと盛り込むべきだと要望もだされ、今後の日ロ関係を考える上での重要な指摘がいろいろなされました。

4月13日：長縄宣博「メッカ巡礼から見る地域大国の輪郭：イスラーム大国としてのロシア」
センター外コメンテータ：松本ますみ（敬和学園大学）

今回は、新学術領域研究「比較地域大国論」の成果論集に収録予定の原稿が提出されました。内容は、19世紀後半から現在までのロシアのメッカ巡礼の歴史を三つに区切り、それぞれの時期について、英領インド、中華民国、中華人民共和国のメッカ巡礼と比較するというものでした。討論者には、「中国に関する記述を正していただき、かつ他分野の方々にもおもしろく読んでいただけるためのご意見を頂戴すべく」、中国イスラーム研究で指導的な立場におられる松本先生に白羽の矢が立てられました。

同時代性と相互の絡まりあいを鳥瞰するとともに、比較対照する時代と地域を明確化し、なおかつ具体的な巡礼者の顔の見える微細な記述をおこなうという作業が抱える緊張感を再認識させるセミナーでした。

5月8日：岩下明裕「国境から世界を包囲する：現場から考える」
センター外コメンテータ：山崎孝史（大阪市立大学）

岩下氏が研究代表を務めるGCOE「境界研究の拠点形成」の研究成果である『日本の国境問題』（『環』別冊号、2012年）の巻頭論文が、今回の選任セミナーでの討議の対象となりました。日本のあらゆる領土問題を扱う特集号の巻頭論文であり、北方領土に限らず、どう国境問題を扱うのか、岩下氏の境界論が真価を問われる論文集です。とりわけ従来の国境ないし境界研究が陸域の国境を対象としてきたのに対して、日本の国境は海域であり、それをどう論じるかは工夫の求められるところです。岩下氏は海域でも海境でもなく「海疆」ユーラシアという独特の用語によって境界性をもった海域を表したいと考えています。

コメンテーターの山崎孝史氏からは、岩下氏の業績が境界の多次元性、現場の重要性、中央中心主義の克服という意味で成果があったと評価する一方で、全体をまとめるさらなる理論化の必要性が指摘されました。

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 128 号以降、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE 研究会、世界文学研究会、北海道中央ユーラシア研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。ただし、上で特に紹介したものは省略します。[大須賀]

- 2月1日 吉見宏 (北大・経済)「会計・監査の『境界』とグローバル化」(ボーダースタディーズ・セミナー)
- 2月4日 植田暁 (東京大・院)「帝政ロシア支配期のクルグズによる騒擾と蜂起: フェルガナとセミレチエの比較を中心に」(北海道中央ユーラシア研究会)
- 2月6日 古宮路子 (東京大・院)「もう一つの『三人のふとっちょ』としての『羨望』: Yu. オレーシャの初期二作品をめぐる」(世界文学研究会)
- 2月14日 A. アキモヴァ (サハリン国立大・院, ロシア)「ニコライの日記の芸術的独自性 (ロシア語)」(センター・セミナー)
- 2月15日 平野恵美子 (筑波大)「シャンカールとバヴロワ in London」(世界文学研究会)
- 2月16日 E. ノゴイバエヴァ (Polis Asia 分析センター, クルグズスタン)「クルグズスタンのステレオタイプと現実: 中央アジアとロシアからの視線の比較分析 (ロシア語)」(センター・セミナー)
- 2月17-18日 2011 年度合同研究会「亡命と移動の視点から見たロシア」 大平陽一 (天理大)「移動的視覚: その歴史に関する走り書き的報告」; 諫早勇一 (同志社大)「異境のモスクワ芸術座: モスクワ芸術座プラハ・グループと女優マリア・ゲルマーノワ」; 望月恒子 (北大・文)「プーニンの後期作品における風景描写について」; I. メリニコヴァ (同志社大)「イヴァン・モジューヒンと 1920-1930 年代のヨーロッパ映画におけるロシアのイメージ」; E. イコンニコヴァ (サハリン国立大, ロシア)「Восток в творчестве Власа Дорошевича»; N. ポタポヴァ (同)「Журнальная периодика дальневосточных баптистов (1920-22 годы)」
- 2月20日 仙石学 (西南学院大)「中東欧諸国における政党システムと政策の連関: 経済・福祉を軸に」; 林忠行 (京都女子大)「ポスト社会主義期のスロヴァキア政党政治における新自由主義」(客員研究員セミナー)
- 2月22日 S. ムヒナ (日露青年交流センターフェロー)「ロシア経済におけるエネルギーの役割とロシアと日本の関係」(GCOE-SRC 研究員セミナー)
M. ライト (トロント大, カナダ)「Reform of the National Police in the Republic of Georgia since 2003: Causes, Consequences, and Lessons」(新学術セミナー)
- 2月23日 武田雅哉 (北大・文)「よい熊さん・わるい熊さん: 中国のポスターと連環画をよむ」(ボーダースタディーズ・セミナー)
- 2月24日 阪本秀昭 (天理大)「北米の正教古儀式派教徒間の宗教的対立について: 宗教会議決議録を資料として」(客員研究員セミナー)
- 2月28日 豊川浩一 (明治大)「『啓蒙の世紀』におけるロシアの『発見』: キリーロフのオレンブルク遠征 (1735-37 年) を中心に」(客員研究員セミナー)
GCOE ボーダースタディーズ特別セミナー「中国とインドの国境地帯を行く: カシュガルからチベット」 吉田修 (広島大)「中印係争地アクサイチンの今」; 石井明 (東京大)「チベットの今: ラサ・シガツェ・ギャンツェ」
- 2月28-29日「プラトンとロシア」2011 年度研究会 宍内勇津流 (センター)「フィラレート (ドロズドフ) の神学的立場」; 坂庭敦史 (早稲田大)「スタンケーヴィチとプラトン」; 下里俊行 (上越教育大)「ナデージュエンの時間概念」; 渡辺圭 (千葉大)「短編『学

- 生』におけるチェーホフの宗教観」；杉浦秀一（北大・メディア）「エヴゲーニイ・トルベツコイとゼニコフスキイのソロヴィヨフ論」；貝澤哉（早稲田大）「ローセフの『名の哲学』について」
- 3月2日 新学術領域研究「比較地域大国論」ワークショップ「帝国の遺産としての人間の移動とディアスポラ」 E. ホー（デューク大、米国）「ムスリムのディアスポラと欧米列強：ウサマ・ビン・ラーデンの先駆者たち」；長縄宣博（センター）「アラビアのハキーモフ：ヒジャーズ地方におけるロシア帝国とソ連のムスリム外交官（1890年代から1930年代）」；小松久恵（センター）「To Be or Not To Be?: 現代英国南アジア系作家が描く『ホームランド』」
- 3月3日 大倉忠人（法政大・院）「なぜナルン市民は立ち上がったのか：領土「売却」問題を巡るナルン州政府における攻防」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 3月6日 中村唯史（山形大）「＜歴史の超克＞としての文芸：ロシア・フォルマリズムとバフチンを中心に」（客員研究員セミナー）
- 3月8日 E. イコンニコヴァ（サハリン国立大、ロシア）「サハリンとクリル諸島の文学：多文化モデル（ロシア語）」（新学術セミナー）
- 3月12日 N. シャフナザリヤン（センター）「警察改革：非公式の慣行と反汚職対策（グルジア、アルメニア、ナゴルノ・カラバフの比較）（ロシア語）」（センター・セミナー）
- 3月13日 木寺律子（同志社大）「『おとなしい女』と『おかしな男の夢』：『作家の日記』における『論理的自殺』の問題」（センター・セミナー）
- R. タラス“Russia’s Identity in International Relations: Images, Perceptions, Misperceptions”（新学術セミナー）
- 3月14日 大平陽一（天理大）「北コーカサスのフットボール」（客員研究員セミナー）
- 3月21日 高本康子（センター）「戦時期日本の『喇嘛教』工作」（新学術セミナー）
- 3月26日 瀧口順也（センター）「Paint it Red, 1917- 1929: コミュニスト・ライフ、コミュニスト・カルチャー」（GCOE-SRC 研究員セミナー）
- 4月7日 一緒に考えましょう講座 M. マリコ（ベラルーシ科学アカデミー）、E. ステパーノヴァ（ウクライナ国立放射線医学研究所）、今中哲二（京都大）「低線量被曝に向き合う：チェルノブイリの教訓から学ぶ」
- 4月10日 E. グチノヴァ（国際交流基金フェロー）「日本人捕虜の絵画における外傷（トラウマ）の言語（ロシア語）」（センター・セミナー）
- 4月11日 R. ソリンジャー“Crossing Borders for Babies: The Global Geography, Economics, and Politics of Motherhood”（GCOE-SRC セミナー）
- 4月24日 秋月準也（北大・文・院）「エヴゲーニイ・ザミャーチンのペテルブルグ表象：凍りつく都市、海に浮かぶ集合住宅」（世界文学研究会）
- 4月26日 三輪博樹（早稲田大）「インドにおける民主主義と政党政治：インドの政治は安定に向かうか？」（GCOE-SRC 研究員セミナー）
- 4月28日 S. アーナンディー（マドラス開発研究所、インド）“The Dalit Feminism Literature in South India”（新学術セミナー）

人事の動き

◆ 新任研究員紹介 ◆

昨年5月以降センターに着任された方および身分が変わった方をご紹介します。カッコ内は仕事場所です。なお新学術領域プロジェクト研究員については、新学術領域研究のコーナーで紹介しています。

福田 宏 助教:2012年1月より新学術領域プロジェクト研究員から転任(プロジェクト室)
研究テーマ:中央ヨーロッパ論、チェコスロヴァキアの近現代史

鄭 齊兒 特任研究員:2011年10月に着任(プロジェクト室)
研究テーマ:音声学、プロソディ研究、台湾国語

花松 泰倫 GCOE プロジェクト研究員:2011年6月に着任(プロジェクト室)
研究テーマ:北東アジアの環境ガバナンス

立石 洋子 非常勤研究員:2012年4月に着任(プロジェクトスペース)
研究テーマ:ソ連における自国史像の変遷

本田 晃子 非常勤研究員:2012年4月に着任(プロジェクトスペース)
研究テーマ:ロシア建築

高橋美野梨 学振特別研究員:2012年4月に着任(プロジェクトスペース)
研究テーマ:境界研究から見る「北極」:デンマークの北極圏戦略と媒介項としてのグリーンランド

中山 大将 学振特別研究員:2012年4月に着任(プロジェクトスペース)
研究テーマ:日本帝国崩壊後の樺太植民地社会の変容解体過程の研究

留任の研究員については紹介を省略させていただきます。詳しくはセンターホームページを参照願います。[宇山]

◆ 2012年度の客員教授 ◆

公募していました客員教授は審査の結果、次の6名の方々をお願いすることになりました。[編集部]

氏名	所属	研究テーマ
貝澤 哉	早稲田大学文学学術院	19世紀後半～20世紀前半のロシアにおける文学生産の場の変容
武隈喜一	テレビ朝日報道局	メディアとしての《革命演劇》からマスメディアへ:文化装置としての<ROSTA>と「赤軍」の研究
等々力政彦	トゥバ民族音楽家	トゥバ語地図の作成:境界領域における民族意識形成への参与観察
豊川浩一	明治大学文学部	18世紀啓蒙主義と学術遠征:「ヨーロッパ的ロシア人」の形成
野部公一	専修大学経済学部	旧ソ連諸国における農業構造および農業生産の変容の比較分析
林 忠行	京都女子大学現代社会学部	チェコスロヴァキアの体制転換と連邦の解体再考

◆ 事務職員 ◆

村岡健一郎事務係長は、北大病院に移られました。

中嶋奏子事務補佐員、近藤温子事務補佐員、太田治子事務補助員は退職されました。

新任紹介:乾優紀子 事務係長(事務室);中野文 事務補佐員(事務室);山崎茜 事務補佐員(事務室);山本房子 事務補佐員(ワークステーション室);原田千里 事務補助員(事務室);畑中誠一 事務補助員(図書室) [乾]

日本正教会見聞録

松里公孝（センター）

モルドヴァのキリスト教民主人民党は、かつてはモルドヴァとルーマニアの合邦を掲げる汎ルーマニア主義政党であった。この党の指導者の一人であるヴラッド・クブリャコフと知り合ったのは、2005年5月のことである。当時は、キリ民党が不倶戴天の敵であったはずの共産党の党首ウラジミール・ヴォローニンを大統領として選出することに賛成投票するというウルトラCをやったのけた（モルドヴァでは議会が大統領を選ぶ）直後であり、キリ民党の指導者たちはアメリカに招かれて、ブッシュ



名古屋教会で松島神父夫妻と

政権や NATO 指導部と今後のモルドヴァの政局運営について討議している最中であった。まあ、ご褒美のアメリカ観光という面もあっただろうが。何らかの理由で早めに帰国していたクブリャコフが、私の相手をしてくれたのである。「小さな我々が、大きな共産党をワルツに招いた。しかし、ダンスをリードしたのは我々である」と後に言って、クブリャコフは笑っていた。敬虔な正教徒であるクブリャコフは、ルーマニア正教会のベッサラビア主教座が、ロシア正教会キシナウ府主教座に属する教区を切り崩す先頭に立っていた。こう書くと、親露的な立場の人から見ればとんでもない人物のようだが、私とは何故かうまが合い、私以外にも日本のモルドヴァ研究者を熱心に助けている有難い人物である。

共産党と事実上の連立を組んだことで、キリ民党は従来の支持層を失ってしまい、2009年の選挙では4%の最低得票率を越えることができず、クブリャコフも民族民主革命期以来20年近く有していた国会議員としてのステータスを失った。おかげでアマチュア歴史家としての自分の研究課題に専念することができるようになった。日本に正教を伝えたのは、言うまでもなく、ニコライ（カサトキン）である。彼は、1971年にロシア正教会によって列聖された。しかし、彼の最も有能な弟子であったチハイ兄弟（修道士で文字通り聖ニコライの女房役であったアナトーリーと教会音楽家であったヤコフ）とドミトリー・リヴォフスキー（教会音楽家）がベッサラビア出身のルーマニア人であり、日本での正教布教に大きな功績を残したことは、歴史上忘却されている。クブリャコフはこれに憤りを感じ、3人のベッサラビア人に正当な評価を下すために研究しているのである。もちろん、日本語も読めない素人研究者だから、長縄光男やシーラ・ノヴィツカヤ（サプリン・在札幌ロシア総領事夫人）などから見れば、彼の知識の水準は滑稽なものだろう。それでも、日露関係の黎明期にベッサラビア人が大きな役割を果たしたことには日露の研究者は注目しないので、第三の見地からの彼の研究には意義があるように思われる。クブリャコフは私より5歳くらい若いですが、時代を共有した者として、「あの時代に遭遇していなければ、私はおそらく神学者か言語学者になっただろう。しかし私は傍観者ではいられなかった」という台詞には、何かを感じずにはいられない。静岡県立大学の六鹿茂夫先生（クブリャコフとは民族民主革命期以来の仲であるから、私と

は友情の年季が違ふ)と資金を折半して、クブリャコフの日本での現地調査を助けることにした。

1月21日(土)、新学術領域研究会での報告を終えるや否や、神戸行きの飛行機に乗る。神戸から電車を乗り継いで新大阪駅付近の東横インに辿りつくと、すでに日本での最初のインタビューであった松山真一教授との面談を終えたクブリャコフがホテルの玄関前で煙草を吸っている。翌日曜日、我々は朝早く新大阪を発って名古屋の鶴舞にある正教会に行く。この教会の司祭は松島ゲオルギー神父である。スラブ研究者の目を引くのは、神父の奥様(正教コミュニティでは司祭がパーチュシュカ、「お父ちゃん」と呼ばれるように、司祭の妻はマートウシュカ、「お母ちゃん」と呼ばれる)である松島マリアさんが故・保田孝一先生の令嬢であることだ。ただ、マリアさんは、父君の職業とは関係なく正教に惹かれたとおっしゃっていた。イコン画家の山下りんに例示されるように、また明治年代の『正教新報』を読めば明らかかなように、日本正教会は黎明期から婦人が果たした役割が大きかったことで際立っている。函館教会のニコライ・ドミトリエフ神父の奥様、山崎スヴェトラナさんにも共通するが、マートウシュカがこれほど活躍するのを他の正教国では見たことがない。マリアさんは自身が音楽家であるばかりでなく、正教音楽史の専門家なので、ヤコフ・チハイやリヴォフスキーの業績を調べたいクブリャコフにとっては、絶好の面談対象である。しかし、マリアさんの方は、近年のルーマニア正教会のセクト主義に辟易しており、ルーマニア正教会の立場を代表するクブリャコフとの間で、それなりに辛辣な会話が交わされた。

欧州、北米、オーストラリアなどは、コンスタンチノーブル世界総主教座の教会法上の領域に属するにもかかわらず、東欧からの巨大な移民人口を抱えるため、母国の正教会(ロシア、ルーマニア、セルビアなど)が当たり前のように自分の教会を開き、著しい場合には主教座を置く。ミュンヘン、シドニーなど大都市には、出身国別の正教会がいくつも併存し、教会法上不正常な事態が生まれている。しかし、日本だけはこうした民族主義とは長く無縁であった。日本正教会の礼拝は、日本語、ロシア語、ルーマニア語で行われ、日本に在住する正教徒のほとんどすべてが参加できる仕組みになっている。ところが、近年、ルーマニア正教会が自前の教会を東京と名古屋に開き、分裂行動を開始したのである(そのうち名古屋の司祭は、情けない話だが、福島原発事故ののち本国に逃げ帰った)。しかもこのような行為の前に、日本府主教への挨拶は全くなかった。こんにち1万人から2万人いる日本の正教徒のうち5千人くらいはルーマニア人(その大多数は日本男性と結婚したルーマニア女性)らしいので、ルーマニア正教会にとっては日本は美味しい市場である。東京のルーマニア大使が述べるころでは、ルーマニア様式の農村木造教会を丸ごとルーマニアから東京に移設するプロジェクトが進行中のようなのである。実際、現状では、ルーマニア正教会の施設よりも日本正教会の建物の方が立派なので、東京と名古屋のルーマニア人の正教徒は、日曜礼拝は母国の教会で行っても、洗礼などの重大行事は日本正教会で行うような二股をかけている場合もあるようである。また、正教が国家丸抱えのルーマニアとは異なり、日本では信者の募金によって教会が維持される(日曜日ごとに寄付が求められる)ことに違和感を感じるルーマニア人も多い。

クブリャコフに言わせれば、150年の伝統を誇る日本正教会が未だにロシア正教会の一部にすぎないことが不正常なのである。日本正教会が独立教会(オートセファリー)であったなら、ルーマニア正教会は、ブカレストから在日ルーマニア人向けに派遣される司祭が日本正教会の司祭として勤めを果たすように交渉したであろう(こうした出向は、公式正教世界でよく行われるようである)。しかし、在日ルーマニア人の宗教生活が問題となっているときに、なぜ我々がモスクワと交渉しなければならないのかとクブリャコフは問う。子供っぽい、学生運動的な論理だが、一応理屈はわかる。

クブリャコフによれば、ロシア正教会が日本史上の正教指導者のうちニコライしか列聖し

ていないのも、日本正教会に権威を与えて独立を促進するようなことのないようにするための政治的な行為である。松島マリアさんに言わせれば、そもそも修道院すらもない日本正教が独立教会になるなどということはあるまい。修道士がいないということは、プロの宗教指導者がいないということである。司祭は教区民に配慮し、コミュニティを維持することに精いっぱい、とても聖典・宗教文献・讃美歌の翻訳などには力を割くことができない（とはいっても、松島神父は重要な翻訳も行っておられる）。チハイヤリヴォフスキーが明治年代に行った讃美歌の翻訳は既にアナクロであり、新訳が必要なのに、自分たちには時間が足りない。列聖者が少ないのは、たんに日本の正教徒がそれを要求しないからである。実際、司祭に妻帯を認める正教および反カルケドン派キリスト教においても、主教以上の地位に就けるのは修道士のみである。日本人の司祭が日本正教会の府主教に任命されるためには、配偶者との結婚を解消し、臨時にロシアの修道院で勤めて修道士にしてもらうしかないのである。クブリャコフに言わせると、チェコ正教会もつい最近まで修道院を持たなかったが、ルーマニア正教会に援助を要請し、資金・人材両面の援助で修道院を設置した。なぜ日本正教会にそれができないのか。

松島さんの肩を持つわけではないが、私の観察でも、日本正教会は独立教会にはなれない。独立教会になるということは、主権国家になるのと同じで、独立した外交方針を持ち、自教会の利益を実現するために世界中で陰謀をめぐらすことである。日本正教会は、コミュニティ活動が大好きで、政治を持ちこむことでコミュニティを分裂させたくないと考えるような純朴な市民活動家の集まりなのだから、外交と陰謀をモスクワ総主教座が引き受けてくれる現状は居心地がいいものなのである。現に近年のルーマニア正教会との紛争についても、モスクワに丸投げするばかりで、日本正教会に主体的な対応策はない。

こうした議論にもかかわらず、名古屋正教会での日曜礼拝は素晴らしいものであった。私は、松島神父の説教に、思わず落涙してしまった。世界中の有名教会や田舎の鄙びた教会で日曜礼拝を傍聴してきたが、説教の素晴らしさに涙を流したのはこれが初めてである。やはり説教は母語で聞かなければならない。松島神父は、礼拝の最後に、クブリャコフを参列者に紹介したが、その紹介も、ロシア正教会の肩を持つようなものではなく、客観的・中立的なものであった。曰く、「いま、モルドヴァの正教徒は困難な状況に直面しています。しかしこの困難は、神と人間の関係にかかわるものでもなければ、正教徒の間のかかわるものでもありません。ただ教会間で管轄について、不同意があるだけです。今日、ここには日本人もロシア人もウクライナ人もルーマニア人も集まりましたが、こんなに素晴らしいコミュニティを我々はもつことができたではありませんか。世界の正教徒がこのように生きることができるようにお祈りしましょう」。

月曜朝には新幹線で横浜に行き長縄先生にインタビューする。その後、谷中霊園で聖ニコライら歴代日本主教の墓を参拝し、六本木のルーマニア大使館を表敬訪問する。もう夕刻であるが、ニコライ堂に突撃して翌々日のアポを取る。翌々日というのは、翌火曜日には、ク



ニコライ堂で小野神父と



函館教会でニコライ神父と

れたイオアン小野貞治神父の出自は、日本主教（イオアン小野帰一）も出した正教エリート家系であり、小野家は聖ニコライ時代の貴重な写真や資料を現代に残してくれた。ニコライ堂の図書館で、私が猛烈な勢いで『正教新報』に目を通し（ひらがなが現代ひらがなとは随分違うので大変である）、アナトーリー・チハイに関する記事を発見するとそれを口述で露訳し、クブリャコフがノートを取る。しかし、『正教新報』自体が膨大な資料であり、こんな方法ではがちが明かぬと午後1～2時ごろには悟り、チハイがベテルブルクで落命した時期的を絞る。すると、チハイに捧げたパナヒダ（告別の辞）で、伝道上チハイのパートナーであった澤井琢磨（神道宮司の息子で、ニコライを切り殺すために屋敷に侵入したが、逆にニコライに諭されて正教徒、やがて日本正教の創始者のひとりになったなどという馬鹿げたお伽噺のヒーロー。ちなみにこの筋書は、勝海舟と坂本竜馬の遭遇記にそっくりである）が、「主教（ニコライ）は我々の父、アナトーリー・チハイは我々の母であった。歴史は、夫の偉業を記す。しかし、夫が偉大なことをなしうるのは、妻が偉大だからだ」といったことを述べているのを発見した。

ところで、私が『正教新報』の関連記事を探している最中、クブリャコフはニコライ堂の写真撮ってくると言って表に出た。すると、僧衣をまとった「ロシア語があまりうまくない」老人に出会った。この老人は、「ここは撮影禁止なのだが、お前には許可してやる」と言った。高位聖職者であることを察したクブリャコフは祝福（ブラゴスロヴェーニエ）を乞い、実際に祝福してもらった。あとで特徴を聞いてみると、どう考えてもダニール日本府主教なのである。「俺は日本府主教から祝福された」とクブリャコフは子供のように喜んでいた。

その夜には札幌に飛び、翌日はスラブ研究センターでの仕事である。望月センター長、最近モルドヴァやプリドニエストルへの関心を募らせている藤森信吉氏と共に昼食を取る。1階の参考図書室で原暉之教授に遭遇し、クブリャコフは、近年ルーマニア・モルドヴァで流布しているらしい、「セルゲイ・ラゾを殺したのは白軍でなく、ポリシェヴィキであった」という説についての原教授の意見を聞いた。4時からは、ロシア総領事館でサブリン総領事夫人・シーラ・ノヴィツカヤさんとの面談である。夜、汽車で最後の訪問地、函館に向かう。

函館ハリストス教会の司祭はニコライ・ドミトリエフ神父である。彼はモスクワの神学校で学んでいた20年前、日本から来た留学生の山崎瞳（スヴェトラーナ）さんと恋に落ち、結婚した。奥さんの実家がある長野の教会に赴任し、その後いくつかの赴任地を経た後、2008年から函館の司祭となった。この3年間は函館教会が函館中央図書館と協力して函館正教150年史を編纂した時期である。先日、素晴らしい本となって出版された。言いかえれば、

ブリャコフは静岡まで戻って静岡県立大学で六鹿先生たちの学生にレクチャーしなければならなかったからである。プリドニエストルでのシェフチュク政権の成立（妖怪的なスミルノフ体制の終焉）はモルドヴァにとってもプラスである、モルドヴァは偽りの中立政策をやめて、はっきりNATO加盟を志向すべきだといった彼の意見が印象に残った。

水曜日は、資料収集の面ではおそらく一番重要なニコライ堂での作業である。我々の面倒を見てく

150年史編纂という大切な時期にニコライ神父が函館に赴任して、歴史家の素養も持つスヴェトラナさんがそれに没頭することになったのである。このような人事は偶然だろうか。日本正教会史上、一番分からないのは、ニコライ赴任以前の、函館教会がロシア領事館の付属教会だった時期であるようだ。当時、沿海州の軍務知事であったピョートル・カザケヴィッチが司祭を函館に貸し出したようである。

大人の男の遊びという感じもしないではなかったが、こうして嵐のような1週間が過ぎた。調査旅行が終わりに近づくにつれ、段々クブリャコフの意図がわかってきた。彼は、アナトーリー・チハイをルーマニア正教会で列聖したいのである。しかもその式典を、ダニール・ルーマニア総主教（面白いことに日本府主教と修道士名は同じである）を招いて東京で行いたいのである。ロシア正教会に挨拶なしでそんなことをすれば、確実に紛争が起こる。そうなれば、私は露ル教会間の喧嘩のお先棒を担いだことになってしまうではないか。くれぐれもモスクワ総主教座・教会間関係局と相談した上で話を進めるように私はクブリャコフに懇願したが、そもそも同局のヒラリオンやニコライ・バラシヨフと話すことに生理的嫌悪を感じているようなので（それは向うも同じである）、なかなか難しいかもしれない。

スラブ研究センターと冬の札幌での5ヵ月

タラス・クジオ（トロント大学ウクライナ研究講座／センター 2011年度特任教授として滞在）

北海道大学スラブ研究センター特任教授としての5ヵ月間の滞在が終了し、帰国するときに来ました。私は、ウクライナに関する1000ページの原稿を仕上げることを可能にしてくれたスラブ研究センターのフェローシップに感謝しています。この原稿は1953年から現代までのウクライナ現代史を扱ったもので、現在北米の大学の出版会で出版の校閲中です。

次に挙げる三つの助力がなければ、スラブ研究センターの滞在期間が我々にとって有意義なものになることはなかったでしょう。第一に、我々は研究センターのスタッフ（特に大須賀みかさんとセンター長の望月哲男教授）の仕事熱心な姿と我々への献身的なサポートを思い出し、ここを去ることができます。クリスマスや卒業式の時期に行われるスラブ研究センターのパーティーやその他のイベントを私たちは懐かしく思い出さずにはいられませんが、望月先生はそういった席でつねに我々のグラスに日本の不老長寿の薬、つまりサケを沢山ついでくれました。また、ウクライナをはじめとする旧ソ連の非ロシア諸共和国研究の日本における第一人者であり、スラブ研究センター特任教授となる手続きのサポートをしてくださった松里公孝教授には個人的にお礼を言いたいと思います。

第二に、旧ソ連の7つの地域から来たスラブ研究センターの外国人たちにとっては、長兄のリーダーシップやアドバイスなしで長期滞在を乗りきるのはもちろん難しいものでしょう。今回の場合、リーダーとして長兄役を担ってくれたのは私の研究室の隣人でもあるヴラディミル・シシキン教授でした。



クジオ氏



仕事のあとの和やかなひととき

我々旧ソ連人は共通するソ連時代の経験によって理解しているのですが、ロシア人を長兄としたリーダーシップはソヴィエト連邦の家族である非ロシア系諸民族の方向性、達成度、献身性、生産性の確保に不可欠なものです。滞在期間中に我々は「兄弟として」頻繁に乾杯をする機会がありましたが、いつも長兄はボトルの3分の2を飲みほします。しかしそれでも残りの3分の1を非ロシア系の7人で分ければよいので満足でした。

第三に、北海道の長い冬はノナ・シャフナザリヤン教授の助力なしでは耐え忍べなかったことでしょう。彼女は前向きで明るく、人生に対する情熱を持ち、すばらしいアルメニア料理、コーヒー、紅茶の作り手でもあります。仕事後には研究室でくつろいだ雰囲気のお茶会を開いてくれましたし、彼女を訪ねてきたお姉さんと妹さんも紹介してくれました。ノナさんはスラブ研究センターの5階のフロアに、研究者同士がよい関係を築けるようなリラックスした雰囲気を作ってくれました。また同時にノナ・シャフナザリヤン教授はスラブ研究センターに三人のセミナー発表者を招き、センター内での知的交流・対話も促進しました。

私が小さな「日本のニューヨーク」とよんでいる札幌は、人々の心を惹きつける北海道の歴史のほんの一部にすぎません。北海道は19世紀において、アメリカ流に「マニフェスト・デスティニー」として開拓されたアメリカ西部と、イギリス流に囚人が移送されたオーストラリアのシドニーという二重の役割を演じていました。私は妻のオクサナとともに日本でクリスマスと新年を過ごせましたが、ほかの外国人研究員たちも美しい日本の様々な地方を経験することができました。巨大で狂騒的だが、途方もなくエネルギーの満ちた東京。寺院が多くゆったりとした雰囲気の京都。私の場合は静岡にも訪れました。また、日本アルプスで大晦日を過ごし、旅館の布団で眠った飛騨高山が印象に残っています。

我々はみな、この先長く心に残るようなすばらしい思い出を胸に日本を発つことでしょう。

(英語から秋月準也訳)



日出ずる国の魅力：礼儀・茶道・書道など

マルガリータ・ジャガリヤン
(サントペテルブルク経済大学学生)

私にとって、日出ずる国への訪問は、最初からどこか特別なものでした。4年以上も夢に見て、2年近く待ち望んだものでした。母のノナ・シャフナザリヤンのおかげで、やっと夢が実現しました。母は、自身の研究に研鑽を重ね、スラブ研究センター外国人特任教授の選考を勝ち抜きました。そのため私も大好きな国を訪れることができたのです。

成田空港に着いた途端に、日本とロシアの間にある違いを感じました。周囲の全てが私に、ここはまるで違う世界で、独特な規則や

慣習がある世界だと語りかけて来たのです。私は、少しでもこの待ち望んだ国の文化を理解するために役にたてばと思い、日本へ向かうにあたって十分に準備し、できるだけ多くの書物を読むように努めてきました。それでも何か間違いをしないかと不安でした。

何よりも驚いたのは、人々の関係性です。私の観察がどの程度普遍的なものかはわかりませんが、相互に尊重しあう姿しか目にしなかったのです。このことが最初に目についたのは、今まで生きてきたロシアで目にしてきた礼儀作法は、いささか違ったものだからです。

ユニークな人間の巣窟のようなスラブ研究センターにおいてもこのような人間関係が満ちていて、お礼の言葉もありません。私の札幌滞在を温かく、心地よいものにしてくださった方々に感謝します。特に松里先生とそのお子さんたちです。また長縄先生はペテルブルク出張の際、来日前の私にビザ書類を持ってきて下さいました。素晴らしい日本のご家庭を訪問し、大いに友好を温めることができました。

望月先生は、世の中の「長」と名のつく人々の中で、最も親しみやすく、話しやすい方として記憶に刻まれています。最初にお会いしたときに、センター長室のホワイトボードから記念にマグネットをいただき、その姿から優しいヴァレリー叔父を思い出しました。

山本さんにも特別な感謝を述べたいです。山本さんは日本での最も素晴らしい思い出を贈って下さいました。彼女のはからいで、一週間日本の「本物」の学校に通うことができたのです。日本のアニメが好きで、少なからず学園物も見てきたので、私にとっては二倍楽しいものでした。学校の雰囲気というもの自分の目で見てそれに触れ、どっぷり浸りたかったのです。もちろん、ロシアの学校との比較も興味深いものでした。

学校に通うにあたっての最初の課題は、校則を知る、ということでした。私の母校では「走らない、飛び跳ねない、先生の話聞く」というもの以外に明文化された規則が無かったので、日本の校則は、私にとって尋常でないものでした。校則を見てわかったのは、これらは冗談などではなくすべて真剣なものであるということでした。ますます興味がわき、学校に行きたい気持ちが抑えられなくなりました。



はるかさん、アンナさんと札幌テレビ塔で
私の隣は従兄弟です



学校の教室で、みんなと一緒に弁当

その後、お借りする制服を受け取りました。学校の制服というものを着たことが無かったので、とても新鮮でした。(ちなみに母はソ連時代に子どもでしたから、学校ではずっと制服を着ていたそうです。) 制服を着て、女の子たちが待つ教室に向かいました。はるかさんとは今でも交友が続いており、無二の親友です。彼女はお友達に私を紹介し、仲間に入れてくれました。言葉の壁があったにも関わらず、女の子たちはみんな私に気を配ってくれました。そのなかで誰よりも親しくなったのは、アンナさんです。彼女とは、授業の間さえひそひそ話したり、お互いの国について語りあったり、感動を分かち合ったり、色んなことについて品定めしたりしました。(訳注：彼女たちは英語でコミュニケーションをしていました。)

学校での日々で印象に残ったことの一つは、お昼ごはんです。何度もアニメでは見ていましたが、わたしの学校ではお昼ごはんを自分で持ってくることはなく、食堂で食べていたので、生徒たちが「お弁当」という小箱を家から学校に持ってきて、お昼休みにみんなで一緒に食べるということに大変驚きました。

古矢先生は、私のことに大変配慮してくださって、最初の日には一人の女子生徒、きほさんに、私が迷わないように家まで送り届けるよう頼んでくださいました。帰り道で、きほさんにどれだけ日本が好きか、話しました。きほさんは、興味深いことをたくさん話してくれ、一緒にお店に行こうと誘ってくれました。その店はきっと私の気に入るだろうと。

大変心地よい日々でした。日本ほど、新参者にこのように親切に対応してくれる国はないと、他の国での経験から、知っているものですから。あらゆる場面で親切にされたものですから、「なかまとしての私」が受け入れられているのだ、と確信がもてました。このことは今に至るまで忘れません。

あっという間に一週間は過ぎました。日々、親しい関係の女の子たちが増えていきました。



書道のクラスに参加

ふざけあい、笑いあい、一緒ににぎやかにお昼を食べ、家から持ってきたおいしいものを分け合ったり、思いついたことを話したりしました。

I先生は、何度か日本文化の授業をしてくださいましたが、その授業は、とても興味深いものでした。I先生は私に、今日まで考えてもみなかった文化の特徴を教えてくださいました。大好きな日本をより深く知りたかったので、彼女と過ごす時間を心待ちにしていました。

I先生、古矢先生、そしてありささんたちのおかげで、茶道のお稽古に参加することができました。とても感激しましたので、作法に則るように、また熱心な弟子であるよう頑張りました。それから書道のクラスにも参加しました。私が書いたものは子どもの落書きのようでしたが、先生から褒めていただけるように努めました。

学校での最後の日は楽しくもあり、悲しくもあるものでした。このような素晴らしい人たちともう会えないかと思うと悲しかったのですが、同時に、札幌での素晴らしい時間を思い出すと、温かい気持ちになります。一緒にたくさん記念撮影をして、アドレス交換をし、いつかまた会おうと約束しました。

写真だけでなく、私の記憶にずっと残るであろう、素晴らしい思い出を作ってくださいました皆様、本当にありがとうございました。

(ロシア語より山崎龍典訳、大須賀監修)

学 界 短 信

◆ 西スラヴ学研究会研究発表会 ◆

3月15日、16日に西スラヴ学研究会の研究発表会がスラブ研究センターで開催されました。同会が首都圏外で研究会を開催する初めての試みとなりました。初日は新学術領域研究6班の支援を受けて、「東欧文学における『東』のイメージ」というタイトルで「移動の文学」と「空間のイメージ」という二つのセッションがおこなわれました。2日目には4本の個人報告がおこなわれ、修士論文を終えたばかりのスラブ研究センター大学院生の西原周子さんはこれが学会デビューとなりました。同会は研究領域を広げるために名称から「西」を取ることを決定しており、「西スラヴ学研究会」としてはこれが最後の研究会となりました。出席者は約30名でした。[越野]

◆ 学会カレンダー ◆

- 2012年6月2-3日 比較経済体制学会全国大会 於帝京大学
- 6月23-24日 日本比較政治学会大会 於日本大学
- 7月4-6日 新学術領域研究「比較地域大国論」第7回シンポジウム 於スラブ研究センター
- 9月6-8日 第4回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会 於コルカタ、インド
- 10月6-7日 2012年度日本ロシア文学会全国大会、ロシア・東欧学会研究大会、ロシア史研究会大会、JSSEES大会 於京都
- 10月19-21日 日本国際政治学会研究大会 於名古屋
- 11月4日 内陸アジア史学会大会 於北海道大学
- 11月13-16日 BRIT XII大会 in 福岡・釜山
<http://www.borderstudies.jp/brit2012/top.html>

11月15-18日 ASEES (スラブ東欧ユーラシア学会) 年次大会 於ニューオーリンズ
<http://aseees.org/convention.html>

2015年8月3-8日 ICCEES 第9回大会 於幕張
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html>

センターのホームページ (裏表紙参照) にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

大学院だより

◆ 修了者・新入生・在籍者 ◆

2011年度、大学院文学研究科スラブ社会文化論専修では、7人が修士課程を修了しました。また、加藤美保子さん、倉田有佳さん、高橋沙奈美さんが年度途中で博士号を取得しました。皆さんの諸方面での活躍をお祈りしています。修士課程修了の石黒さんと野口さんが、下記のように修了者の声を寄せてくれましたので、お読みください。

4月には、修士課程4名、博士課程3名(内部進学)の新入生を迎えました。今年度の大学院生およびスラブ研究センター研究生は以下の皆さんです(研究テーマは仮のものを含みます)。[長縄]

2012年度スラブ社会文化論専修大学院生名簿

学年	氏名	研究題目	指導教員(正・副)
D3	須田 将	スターリン期ウズベキスタンにおけるソヴィエト市民の創出	宇山 岩下
D3	立花 優	アゼルバイジャン現代政治	宇山 松里
D3	井上岳彦	帝政ロシアとカルムイク人	宇山 長縄
D3	櫻間 瑛	ロシア連邦沿ヴォルガ地域における宗教=民族関係	宇山 松里
D3	マルティン・ホシェク	極東におけるチェコスロヴァキア軍団(1918-1920年)	ウルフ 松里
D3	竹村寧乃	ソ連初期ザカフカス連邦	宇山 長縄
D3	秋月準也	ミハイル・ブルガーコフと20世紀初頭のロシア文学	望月 野町
D3	アレクサンドラ・クリャクヴィナ	有島武郎の「或る女」とトルストイの「アンナ・カレーニナ」における女の運命	望月 野町
D3	斎藤祥平	言語学者N.S.トルベツコイとユーラシア主義	ウルフ 望月
D3	松下隆志	ゼロ年代以降のロシアにおけるポスト・ポストモダニズム文学	望月 野町
D3	中冨哲平	コーカサスのトルコ系ムスリム知識人の政治思想とその運動	長縄 宇山
D2	韓寶寓	中央アジア高麗人社会の「改宗と伝統」問題	宇山 長縄
D1	長友謙治	世界の農産物市場におけるロシアの役割	山村 田畑
D1	アセリ・ピタバロヴァ	カザフスタンおよびタジキスタンにおける中国に対する認識	岩下 宇山
D1	西原周子	ヴーク・カラジッチとセルビア標準語	野町 望月
M2	恩田良平	CISにおける経済的地域主義と関税同盟	田畑 宇山
M2	エレナ・ゴルブノワ	ロシア極東地域の発展における中央政府の役割	田畑 山村
M2	高良憲松	チェコスロバキアの対西側外交(1945-1948)	家田 野町
M2	中野 智	クルグズ共和国の経済政策	宇山 岩下
M2	山崎龍典	ソ連に於ける任意スポーツ団体	松里 田畑
M1	河津雅人	ウクライナにおける民主化	松里 宇山
M1	千葉信人	1939-1944年のソ連のフィンランド政策とカレロ=フィン・ソヴィエト社会主義共和国	松里 ウルフ
M1	中田宏治	19世紀初頭の日露外交史	ウルフ 岩下

M1 古川雅規	ロシア語とチェコ語の接頭辞の比較研究	野町 望月
研究生 小野瑞絵	現代の地域紛争における暴力的非国家主体の分析：中央アジア・コーカサスの過激派	宇山
研究生 ヤン・ファベネック	現代における日本と極東ロシアの交流	岩下
研究生 アリバイ・マムマドフ	日露関係における北方領土問題	岩下

研究室を去り、社会で生き抜くために

石黒太祐

チェコ研究を選択した理由

まず、なぜチェコを選択したのかについて述べることから始めよう。私にとってチェコとは練習問題である。大学時代はヨーロッパよりもアジアについて接する機会の多い、政策研究を学ぶ学部で過ごした。第二言語はタガログ語。模擬国連という国際問題をディベートするサークルに所属し、パレスチナ問題の会議を主催、また学外では全国各地の学生と交流した。東南アジア地域研究者である当時の指導教官に従い、2度カンボジアでの調査に参加した。しかしチェコ研究を選択したのは、チェコスロヴァキア初代大統領トマーシュ・ガリグ・マサリクに関心を持ったからである。私は彼の人格・勇気・行動力に感染した。いかに逆境を乗り越えるのか、所与の条件下において劣勢な者（集団、国家等）が優勢な者に対していかに立ち向かっていけばよいのか、「小さな」者はいかに自らの同一性と尊厳を維持できるのか、強さ、寛容さ、力とは何か、などといった問いを自らに立て、チェコ研究を通じてその解答を探すことにした。そしてそこから得たヒントやエッセンスを日本・アジアに持ち帰ろうと思った。大学とは卒業する場所である。一定の成果を出したらそこを去り、社会で生きるのだ。以上が札幌に来た理由である。

何を学んだのか

長らく混迷し紆余曲折した挙句、統治システムの解明という自分の中にあった元々の政策研究指向を再発見し、その原点から今一度始動することにした。同期の皆が修了・進学する中、私一人が依然前進できないことで屈辱の日々であったが、焦る中でも立ち止まり自分の指向性を再確認し成熟できたことで意義ある日々だったとしたい。1970-80年代の「正常化」体制を主題に決めた。人事パターン・権力行使状態・政治裁判を題材に、1950-60年代「プラハの春」期の体制と比較することを通じて、「正常化」体制の統治能力を分析する作業を行った。研究を進めるうちに明確化した主題選択の理由は、その時代におけるチェコスロヴァキア社会の状態が今日の日本社会と重なって見えたからである。軍事介入による「プラハの春」敗北後の失望と諦め、自嘲と憎悪、握手と裏切り。それなりに日々の暮らしを謳歌する一方で、再び人びとは不安と疑心暗鬼を抱え、公的問題に関わるのを避け、社会から退却していった。統治権力側を研究することにしたが、主題選択のきっかけは「憲章77」に関心を持ったからである。「憲章77」は逆境が人びとを結びつけるのだということ、先の見えない将来の中でリスクを引き受け行動する勇気、人生において信念を持つことの大切さを示した。もちろん人は単純な立場、状況に生きているのではない。時代・社会が変われば価値体系も変わる。党最高幹部が最終的に自ら主導した粛清の標的になり処刑され、終身刑判決を受けた者が後に党書記長になり、あるいは「憲章77」の元政治犯が後に大統領になる。いくつもの人びとの不条理な体験を知ること、自らの思考と行動の一貫性を維持すること、仲間を大切にすること、どこまでも可能性を追求することが、今後私と私の大切な仲間たちがこの社会で

生きていくのに必要なことだと思い至った。修士課程における個人的成果はこのようなものと捉えている。

可能性の追求

専門を活かすことについて考えることがある。私の場合、チェコ語とチェコ現代史の知識を活かせる仕事に就くことが専門を活かすことになるのだろう。だが必ずしもそうは思わない。私は専門を活かすとは、可能性を追求することだと考えている。チェコ語とチェコの知識を使う機会はどれだけあるだろうか？このような意味での専門に固執すれば、私は自ら将来の可能性を狭めることになる。

例えば大学で平和構築学を学び国際機関で働きたいと思っていたが、就職先はパン屋の店員になったとしても専門を活かすことができる。兵士を武装解除して社会成員としていかに包摂していくかという課題に取り組んで得た知見は、パンの販売を通じていかに閑散とした駅前通りに人びとを呼び戻すかという課題に取り組む際に活用し得る。私はチェコ語とチェコの知識とは、いかに崩壊した社会を再生させるか、いかに価値体系が激変し何事によっても保障されない中で自分の力で生き抜くのか、いかに他人のために自分の意思を貫くのかといった課題に対する解答に到達するためのアクセス手段にすぎないと捉えていた。チェコ語とチェコの知識という専門は、これまで述べてきた社会で生き抜くヒントやエッセンスを掴むため、つまり可能性を追求するためのものだった。こう考えれば私がこれまで取り組んできたことは、どんな道を歩もうが、どこで生きていようが、何をしようが十分に活かすことができる。ゆえに我々は、自らの意思で何だって取り組んでもいいし、何だってすることができるのだ。我々の意思次第で常に我々の目の前には、どんな可能性だって開かれている。

2年間の激闘

野口健太（在ロシア大使館専門調査員）

大学院の入試を受けにきた2010年2月、スラ研の試験会場に入ると日本人は私ただ一人、まわりに同期となるロシア人とカザフスタン人の女性がいました。また試験の面接では全教員10名前後が私に視線を向けてきました。この時から「とんでもないところに来てしまった」と思いました。

この予感は現実のものとなりました。莫大な量の予習、経済学理論習得のための数多くの授業、将来のキャリア形成を考えた上で履修した授業、私の研究報告後、指導教員の田畑先生が見せる苦笑い、・・・などなど。ただこれらを含め大学院でやってきたことひとつひとつが、自分の肉となり血となったことには言うまでもありません。特に修士論文提出を前にして、毎週火曜日、田畑先生の前で20分の発表を行い、時には60分近くも討論を続けたことは、非常に有意義なものとなりました。このように多くの時間を私のために割いてくださった田畑先生を始めとするスラ研や経済学部などの先生方、研究員の方々、事務・スタッフの方々、大学院の先輩・同期・後輩の方々にご指導ご鞭撻をいただき、このたび無事修了することができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

この2年間は充実した環境の中で勉強することができましたので、この経験は今後の専門調査員としての仕事や、それ以降のキャリアにも役立つと思います。私の経験から言えることは、修士の2年ないし3年を充実した時間とするのは自分次第だということです。たしかにスラブ研究センターには世界で活躍される先生方がたくさんおり、資料もかなり豊富にあり、院生室の環境も相当充実しているので、その中だけで何かに一生懸命取り組むことも大

変有意義かと思えます。ただそこから自ら一步踏み出し、別の環境下で新たな視点を得ることも大変有意義でした。私の場合、北海道大学の他学部で自身の研究や今後のキャリアに活かせるような授業に参加してみたり、海外に行って現地調査を行ってみたりなど、多くのことにチャレンジしました。2年間が終わり相当疲れましたが、やってきたことに間違いはないと言い切れる自信があります。

今後もスラブ・ユーラシア地域に関心を持った多くの後輩がスラブ社会文化論に入学してくれることを望んでいます。その中で先輩としての私の経験を、スラブ研究センターでの勉学とキャリア形成に役立ててもらえると嬉しいです。

図書室だより

◆ Integrum データベースを導入 ◆

スラブ研究センターでは、この4月より、ロシア、旧ソ連諸国の新聞記事等を収録するオンラインデータベース Integrum を導入しました。このデータベースは、ロシアを中心に、旧ソ連諸国の多くの新聞や通信社の配信記事等をデータベース化したもので、一部は1990年代からですが、主に21世紀に入って以後の記事を収録しています。

インターフェイスは、英語とロシア語が用意されています。このデータベースは、学内のインターネット接続端末からIP認証により利用できます。[兔内]

◆ 『漁業』誌マイクロフィルムを購入 ◆

センター図書室は、この春、ソ連邦の漁業官庁の機関誌『漁業 Рыбное хозяйство』のマイクロフィルムのうち、1921年から1954年の分を購入しましたので、お知らせします。

この雑誌は、『ロシア漁業産業局ビュレティン Бюллетень Главного управления по рыболовству и рыбной промышленности в России』の名で、1921年12月に創刊されました。その後、発行する官庁の組織替えなども影響してか、タイトルをしばしば変更し、1923年11月からは、『漁業ビュレティン Бюллетень рыбного хозяйства』と称するようになります。この間、刊行頻度は、週刊から月刊まで、たびたび変更されましたが、内容的には、漁業の政策や各地の状況、統計、技術、海外の動向や最新の文献を紹介するもので、そう大きな変化はありません。各号少ない時で30ページ前後、多い時はその倍以上の分量のこともありました。1930年に『漁業 Рыбное хозяйство』となりますが、同年すぐに『社会主義漁業を目指して За социалистическое рыбное хозяйство』に改題、翌1931年7月には『ソ連邦漁業 Рыбное хозяйство СССР』と改題、そして1937年の1号から再び『漁業 Рыбное хозяйство』に戻して現在に至ります。1930年代以降はおおむね月刊ですが、1933年ごろ季刊となった時もあります。また、1942～1945年の間は刊行が停止されていたようです。

本誌の1920年代、30年代については、一橋大学、東京海洋大学、東京大学等がその一部を所蔵するようです。また、本学水産学部は1954年10月号以降のほとんどの号を所蔵しますが、今回のフィルム購入は、1930年代に一部欠号があるものの、創刊以来の大部分が揃ったことで、極東水域を含めたソ連各地の漁業、日ソ間の漁業問題、海獣猟などの問題を検討する上で役立つものと期待します。

センター図書室では、この他にも数点、興味深い資料を購入することができましたが、それらについては、次号以降で紹介させていただくことにします。[兔内]

編集室だより

◆ スラブ・ユーラシア叢書第11巻の刊行 ◆

このたび「スラブ・ユーラシア叢書」シリーズの第11巻として、北海道大学出版会から田畑伸一郎・江淵直人編『環オホーツク海地域の環境と経済』が刊行されました。本書は、オホーツク海の環境を守ることが環オホーツク海地域だけでなく、太平洋をはじめとする地球規模での環境保全にとっても重要であるというメカニズムを解説するものです。そして、オホーツク海の環境保全のためには、アムール川流域を含む周辺地域全体の環境保全に向けた取り組みが必要であることを説いています。また、環オホーツク海地域における社会・経済活動の現状を描き出し、その活動の持続的発展の問題を考察しています。本書は、北海道大学の低温科学研究所（研究代表者：江淵直人）とスラブ研究センター（研究代表者：田畑伸一郎）、北見工業大学未利用エネルギー研究センター（研究代表者：庄子仁）が2007年度からおこなってきた学際的共同研究「環オホーツク環境研究ネットワークの構築」の成果の1つとして刊行されるものです。このプロジェクトでは、オホーツク海に関わる自然科学的な研究とロシア極東に関わる社会科学的研究が、ロシアや中国などの研究者との国際的な連携のもとに進められてきました。オホーツク海を取り囲む地域についてこのような学際的、国際的なプロジェクトがおこなわれたのはおそらく初めてのことであり、本書は、文理の研究者の連携によって、その成果をまとめたものです。内容は以下のとおりです。[田畑]

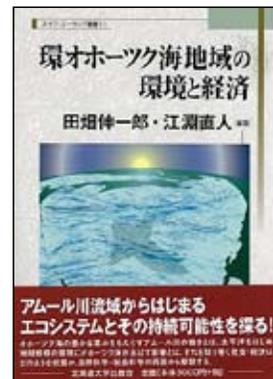
序章： 田畑伸一郎・江淵直人

第1部： オホーツク海のエコシステム

- 第1章： 大島慶一郎／オホーツク海の海洋循環・海氷生成と温暖化の影響
- 第2章： 西岡純／オホーツク海域の豊かな生態系を生み出す鉄供給システム
- 第3章： 三寺史夫・中村知裕／数値モデルを用いた環オホーツク海地域の環境研究：将来予測へ向けて
- 第4章： 庄子仁・南尚嗣・八久保晶弘／オホーツク海のメタンシープとメタンハイドレート
- 第5章： 白岩孝行／オホーツク海の命運を握るアムール川

第2部： 環オホーツク海地域の資源開発と経済

- 第6章： 田畑伸一郎／環オホーツク海地域の経済発展
 - 第7章： 本村真澄／ロシア極東・東シベリアにおけるエネルギー開発
 - 第8章： 西内修一／オホーツク海の水産資源と漁業
 - 第9章： 封安全／環オホーツク海地域における木材の生産と貿易
 - 第10章： 田畑朋子／ロシア極東の人口減少問題
- 終章： 白岩孝行・庄子仁



◆ スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 4 『文化空間としてのヴォルガ』の刊行 ◆

3月末スラブ・ユーラシア研究報告集第4号『文化空間としてのヴォルガ』（望月哲男、前田しほ編）が発行されました。科学研究費研究基盤（A）「ヴォルガ文化圏とその表象に関する総合的研究」（2009-11年度）の成果をまとめたもの。ヴォルガがロシアの川となるまでの歴史的経緯論に始まって、18-20世紀の文芸におけるヴォルガ表象の特徴を巡る議論を詩、散文、フォークロア、映画絵画などのジャンルにわたって論じています。またカルムイキア、

タートルスタンの非ロシア人ヴォルガ住民の文化史を巡る議論も掲載されています。以下のサイトでも閲覧可能です。[望月]

<http://volga.jp/publishing/publishing.html>

- 三浦清美 「歴史的ヴォルガ：ヴォルガがロシアの川となるまで」
井上岳彦 「モラヴィア派入植地サレプタ：カルムイク人との交流と宣教師の記録」
鳥山祐介 「エカテリーナ期 - ナポレオン戦争期のロシア詩の中のヴォルガ：『ロシアの母なる川』が誕生するまで」
望月哲男 「三つのヴォルガ像：1856年の文人調査旅行から」
熊野谷葉子 「サラトフ小唄の流行と衰退に見るヴォルガ沿岸のロシア・フォークロア」
中村唯史 「ゴロキキーの自伝的作品におけるヴォルガの印象の薄さについて」
長谷川章 「『ヴォルガ・ヴォルガ』とヴォルガ表象」
鈴木正美 「ヴォルガの視覚表象：絵はがきと風景写真、映画『ヴォルガ、ヴォルガ』から現代アートへ」
櫻間瑛 「文明の交差点における歴史の現在：ボルガル遺跡とスヴィヤシク島の『復興』プロジェクト」

◆ ACTA SLAVICA IAPONICA ◆

第32号は、ほぼ内容が確定し6月頃には刊行される予定です。[野町]

◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第59号は、審査の結果、以下の原稿を掲載することになりました。早期に出版できるように鋭意努力してまいります。

<論文>

- 乗松亨平 「後期ソヴィエトにおける『生の構築』：ユーリー・ロトマンの演劇的文化論の社会史的考察」
中村唯史 「1910-20年代のエイヘンバウム：フォルマリズムとの接近と離反の過程」
左近幸村 「19世紀後半から20世紀初頭にかけてのロシアの茶貿易：汽船との関係を中心に」
森下嘉之 「チェコスロヴァキア第三共和国（1945-1948年）期における社会政策の変容：住宅政策の分析を中心に」
徳永昌弘 「戦後シベリアの社会主義工業化：アンガラ川流域開発を中心に」

<書評>

- 田畑理一 武田友加著『現代ロシアの貧困研究』（東京大学出版会、2011年）

今回は、掲載数こそ少ないですが、多方面にわたる力作が揃いました。丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に御礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。次の第60号の原稿締め切りは、2012年8月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。[長縄]

誰が何をどこで

2011年(1~12月)の専任研究員・助教・客員教授の研究成果、研究余滴のアンケート調査(提出は任意)を以下のようにまとめました。なお分類方法は北大の大学情報データベースになっています。〔五十音順〕〔大須賀〕

家田修 ㊦ 2 その他業績(論文形式) (2) 研究ノート等 ▼ハンガリー産業廃棄物流出事故に見る東欧とEUの境界『境界研究』2:149-172 ▼地域間比較でみた中東の政変『地域研究』12(1):39-44 ▼ニールハウゼン・エミル先生と日本の東欧研究者『東欧史研究』34:41-46 ▼境界の北ユーラシア:自然改造から広域環境政策、そして環境リテラシーへ『シーダー』6:3-5、及び特集の企画編集 (5) その他 ▼ハンガリー赤泥流出事故の背景と教訓『ドナウの四季』9:2-3

岩下明裕 ㊦ 1 学術論文 ▼北方領土「不法占拠」と「固有の領土」の呪縛をどう乗り越えるか『世界』別冊「新冷戦ではなく、共存共生の東アジアを」816:79-86 ㊦ 2 その他業績(論文形式) (2) 研究ノート等 ▼国境と戦争:北緯50度からみた「平和」『平和文化研究』32:3-22 (3) 書評 ▼山崎孝史著『政治・空間・場所:「政治の地理学」にむけて』(ナカニシヤ出版,2010)『境界研究』2:203-206 ㊦ 3 著書 ▼(編集) *India-Japan Dialogue: Challenge and Potential* [比較地域大国論集6] 42 (スラブ研究センター) ▼(編集) 日米同盟と東アジアで生じつつある困難:航行の自由と北朝鮮『スラブ研究センターレポート』8 ▼(編集) 境界地域研究ネットワーク JAPAN の立ち上げに向けて:国境フォーラム IN 対馬『ライブ・イン・ボーダースタディーズ』5 ▼(編集) 国境を紡ぐ:与那国から台湾へ『ライブ・イン・ボーダースタディーズ』7 ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼(池直美と) *Visualizing Borders: Museum Exhibition at Hokkaido University, Symposium "Urban Conflicts: Ethno-national Divisions, States and Cities,"* Belfast (2011.5.19-21) ▼ボーダー・スタディーズの挑戦:なぜ日本の国境問題が解決されないか?,日本平和学会春季大会・部会「境界の現実とその変容」,新潟(2011.6.4-5) ▼*Mobile Islands on the Border: The Kuril Island, BRIT XI "Border Regions in Transition,"* Geneva, Grenoble (2011.9.6-9) ▼*Bordering Northeast Asia: Japan as a Multi-borderlands Space*, 国際地理学会 (IGU), Santiago (2011.11.14-17) ▼*Northeast Asia as a Part of Eurasia*, アジア太平洋フォーラム 2011, Moscow (2011.11.28-29) ▼*Eurasia Border Review and Japan*, パルダイクラブ中国・ロシアセッション会議,上海(2011.12.3-4) ▼*Bordering Japan: Alert to the US Policy-making Community*, The Brookings Institution, Washington DC (2011.12.8)

宇山智彦 ㊦ 1 学術論文 ▼*The Alash Orda's Relations with Siberia, the Urals and Turkestan: The Kazakh National Movement and the Russian Imperial Legacy* (UYAMA Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts*, 271-287, London: Routledge) ▼*Бакытжан Каратаев и алашордынцы: изменения взаимоотношений, Вопросы истории и археологии Западного Казахстана*, 2:14-19 ▼*Восприятие международной обстановки начала XX в. А. Букейханом и его современниками («Алаш мұраты және тәуелсіз Қазақстан»: Халықаралық ғылыми-практикалық конференцияның материалдарының жинағы*, 13-19, Астана: Беркут-Принт) ㊦ 2 その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼*Introduction: Asiatic Russia as a Space for Asymmetric Interaction* (UYAMA Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts*, 1-9, London: Routledge) ▼勃興する第二地域と日本:中央アジア史から見た「文明の生態史観」(小長谷有紀責任編集『梅棹忠夫:知的先覚者の軌跡』56-57,国立民族学博物館) ▼中央アジア・南カフカス諸国(解説)(松本弘編著『中東・イスラーム諸国民民主化ハンドブック』404-409,明石書店) ㊦ 2 その他業績(論文形式) (2) 研究ノート等 ▼(程艳阳訳)日本の中部欧亚研究:俄罗斯研究与东方研究的紧密结合『俄罗斯研究』122-127(2011年第1期) (3) 書評 ▼浜由樹子著『ユーラシア主義とは何か』(成文社,2010)『国際政治』163:180-183 (5) その他 ▼(エッセイ)佳景にして温かきアルマトゥ:1990年代の思い出(『アルマ・アタ:日本人のバイオニア達』2011.12.6掲載 [http://www.alma-ata.jp/ 思い出文集/宇山智彦-94年3月着任/]) ▼(インタビュー) Приоритет ханам, или Почему «Алаш» остается на задворках истории (Радио Азаттык, 2011.4.21 [http://rus.azattyq.org/content/tomokhiko_yuama_kazakhstan_japan_russia/9500296.html]) ▼(座談会) К 20-летию своей независимости Казахстан стал «независимым» от своего народа (Радио Азаттык, 2011.7.11 [http://rus.azattyq.org/content/kazakhstan_independence_20/24259747.html]) ㊦ 3 著書 ▼(編著) *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts*, xv+296 (London: Routledge) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼*Восприятие международной обстановки начала XX в. А. Букейханом и его современниками*, Международная

- конференция: Идея Алаш и Независимый Казахстан, Дворец независимости, Астана (2011.9.13)
 ▼ Institutional Change in Kyrgyzstan's Politics after the Second Revolution, XII ESCAS (The European Society for Central Asian Studies) Conference, University of Cambridge (2011.9.20)
- ウルフ、ディビッド** ㊦ 1 学術論文 ▼ (鶴見太郎訳) サハリン／樺太の一九〇五年、夏：ローカルとグローバルの狭間で (原輝之編著『日露戦争とサハリン島』397-414, 北海道大学出版会) ▼ スターリン：国境の男『書齋の窓』606:24-27 ㊦ 3 著書 ▼ (James Hershberg, Sergey Radchenko, Peter Vamos と共著) *The Interkit Story: A Window into the Final Decades of the Sino-Soviet Relationship* [Cold War International History Project Working Paper, No. 63], 106 p. (Washington, DC: Woodrow Wilson Press) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Stalin and the Redrawing of Soviet Asian Borders, Conference on "L'URSS et la deuxième guerre mondiale," Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, Paris (2011.5.5) ▼ Origins of Interkit, "Interkit": An International against China? Policy Coordination and National Interests in the Soviet Bloc in the Second Half of the Cold War, Freiburg, Germany (2011.5.12) ▼ Stalin and Pan-Asianism: "The Peoples of Asia are Looking to You with Hope," International Symposium "Alliances and Borders in the Making and Unmaking of Regional Powers, SRC, Sapporo (2011.7.8) ▼ Stalin's Border Politics, Summer Program in Border Studies sponsored by GCOE, Sapporo (2011.8.1)
- 大平陽一** ㊦ 1 学術論文 ▼ ヤーコブソンの構造詩学とロシア・フォルマリズム (あるいはポスト構造主義) 『アゴラ』(天理大学地域文化研究センター紀要) 8:87-106 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ (雑誌連載コラム) ヨーロッパ余談横断『フットボリスタ』2011.1.12号 (24) ~ 12.7号 (33)
- 越野剛** ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (4) 翻訳 ▼ (共訳) アンドレイ・フェダレンカ著「ブリヤハ」(高野文緒編『時間は待ってくれない：21世紀東欧SFファンタスタチカ傑作集』76-93, 東京創元社) ㊦ 3 著書 ▼ (共著) 二十世紀ロシア文学におけるサハリン島：チェーホフと流刑制度の記憶 (原輝之編著『日露戦争とサハリン島』129-155, 北海道大学出版会) ▼ (共著) 「手描きの恋愛小説とアルバムの伝統：学校の少女文化」「戦争の記憶とナロードの英雄：イワン・スサーニンの物語」(野中進他編著『ロシア文化の方舟』149-156; 240-248, 東洋書店) ▼ (共著) ツングース事件の謎：消えた落下物をめぐる物語 (一柳廣孝、吉田司雄編著『ナイトメア叢書⑧天空のミステリー』91-98, 青弓社) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ ナポレオン戦争におけるマロース (冬の寒さ) の表象, 日本ロシア文学会 2011 全国大会, 慶應義塾大学 (2011.10.8-9) ▼ Представления о «Холодной» войне в литературе и карикатуре, East-Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, Beijing (2011.8.28) ▼ Образ Китая в современной русской литературе, Международная научная конференция «Русская литература: традиции и современность» и Ежегодное заседание Китайской ассоциации по изучению русской литературы, 北京外国語大学 (2011.9.11) ▼ Images of China in Russian Literature, International Conference "Comparative Aspects on Culture and Religion: India, Russia, China," Bangalore (2011.9.15-16)
- 後藤正憲** ㊦ 1 学術論文 ▼ Demarcation and Recollection of Collectivity in a Chuvash Village, Russia 『国立民族学博物館研究報告』35(3):527-539 ▼ 思いだすために忘れる：チュヴァシ農村における集団化の記憶 (小長谷有紀他編『社会主義的近代化の経験：幸せの実現と疎外』317-342, 明石書店) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ チャパーエフ少年の寢床『スラブ研究センターニュース』127:16-19 ㊦ 3 著書 ▼ (小長谷有紀との共編著) 『社会主義的近代化の経験：幸せの実現と疎外』346 (明石書店)
- 阪本秀昭** ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ (雑誌記事) 米国オレゴン州で出会った函館・旧満洲の古儀式派教徒関係者たち『 Север Сее-Велл』27:71-76 ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 旧満洲におけるロシア人：日本人との接触と交流, 天理大学公開講座「地域研究への招待」第2回 (2011.7.2) ▼ Воспоминания о послевоенном периоде русской деревни Романовки в Маньчжурии, XXУП российско-японского симпозиума ученых ДВО РАН и района Кансай, Владивосток (2011.9.5) ▼ 満洲から移住した正教古儀式派教徒礼拝堂派のネットワーク：ロシア・アメリカ・カナダ・南米, 第21回近現代東北アジア地域史研究会大会, 近畿大学 (2011.12.17)
- 仙石学** ㊦ 1 学術論文 ▼ 中東欧諸国におけるケア枠組みのジェンダー的側面：女性に期待される役割が国により異なるのはなぜか (日本比較政治学会編『ジェンダーと比較政治学』[日本比較政治学会年報13] 1-32, ミネルヴァ書房) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ チェコ共和国 (宇佐見耕一他編『世界の社会福祉年鑑 2011 年版』167-186, 旬報社) (3) 書評 ▼ 小森宏美著『エストニアの政治と歴史認識』(三元社, 2009) (日本政治学会編『年報政治学 2011-I』305-306, 木鐸社) ㊦ 3 著書 ▼ (林忠行との共編著) 『ポスト社会主義期の政治と経済：旧ソ連・中東欧の比較』[スラブ・ユーラシア叢書 9] 360 (北海道大学出版会)

田畑伸一郎 ㊦ 1 学術論文 ▼ Growth in the International Reserves of Russia, China, and India: A Comparison of Underlying Mechanisms, *Eurasian Geography and Economics*, 52(3)409-427 ▼ 2010 年のロシア経済：強いられる成長モデルの修正 『ロシア NIS 調査月報』6-24 (2011.5) ▼ ロシア：エネルギー政策と気候変動政策 (亀山康子、高村ゆかり編 『気候変動と国際協調：多国間条約の行方』331-351, 慈学社出版) ▼ マクロ経済・産業構造 (吉井昌彦、溝端佐登史編 『ロシア経済論』49-71, ミネルヴァ書房)

▼ ロシア財政制度の資本主義化 (仙石学、林忠行編 『ポスト社会主義期の政治と経済：旧ソ連・中東欧の比較』301-317, 北海道大学出版会) ▼ (上垣彰との共著) 現代の国際金融構造におけるロシア、中国、インド 『比較経済研究』48(1):15-26 ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Growth in the International Reserves of Major Regional Powers: Comparisons of Russia, China, and India, The 5th Indo-Japanese Dialogue on “The BRICs as Regional Economic Powers in the Global Economy,” Jawaharlal Nehru Institute of Advanced Study (JNIAS), Delhi (2011.12.26) ▼ Growth in the International Reserves of Russia, China, and India: Implications for the World Economic System, Institute for European, Russian and Eurasian Studies (IERES), Seminar “China, Russia, and the Existing World Order: Seeking to Overthrow the Status Quo or Merely Pursuing Advantage within It?” (2011.11.21) ▼ Why Did Russia Escape Dutch Disease in the 2000s?, 43rd annual convention of ASEES, Washington DC (2011.11.20) ▼ 2000 年代におけるロシア極東の経済発展, 第 4 回北東アジア地域協力発展国際フォーラム, ハルビン (2011.6.14) ▼ Russia, China, and India: A Challenge to the World Economic Order, Indo-Japanese Dialogue on Eurasia, SRC, 札幌 (2011.3.11)

宍内勇津流 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼ (新刊紹介) 北海道を中心とした日本全図 札幌中心正距方位図法 600 万分の 1 『地図中心』460:41 ㊦ 3 著書 ▼ (編) 『地図情報共有化に向けての課題』(グローバル COE プログラム 「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」特別報告書) 61 (スラブ研究センター) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼アレクサンドル1世時代のフィラレートとその周辺, 「ブラトンとロシア」研究会, スラブ研究センター (2011.3.1)

豊川浩一 ㊦ 1 学術論文 ▼ 「植民国家」ロシアの軍隊におけるカザークの位置: 18 世紀のオレンブルク・カザーク創設を中心に 『歴史学研究』881 [特集 変容する「軍隊」「戦争」像: 帝国・国家・地域社会と武装する民衆] :34-48 ▼ А.С. Пушкин и П.И. Рычков: Исторические источники пушкинской «Истории Пугачевского бунта», *Русский бунт на страницах повести А.С. Пушкина «Капитанская дочка»*, Вторые научные пушкинские чтения (Оренбург) 13-18 ㊦ 4 その他業績 (著書形式) ▼ (共著) 第 4 章第 4 節 (中野隆生、中嶋毅共編 『文献解説 西洋近現代史 2 近代世界の確立と展開』62-69, 南窓社)

㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 18 世紀ロシアにおける国家と民間習俗の相克：シンピルスクの「魔法使い」ヤーロフの裁判を中心に, 日本 18 世紀ロシア研究会, 明治大学 (2011.9.23)

長縄宣博 ㊦ 1 学術論文 ▼ The Hajj Making Geopolitics, Empire, and Local Politics: A View from the Volga-Ural Region at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries (Alexandre Papas, Thomas Welsford, and Thierry Zarcone, eds., *Central Asian Pilgrims: Hajj Routes and Pious Visits between Central Asia and the Hijaz*, 168-198, Berlin: Klaus Schwarz Verlag) ▼ Musul'manskoe soobshchestvo v usloviakh mobilizatsii: uchastie Volgo-Ural'skikh musul'man v voynakh poslednego desiatilennia sushchestvovaniia Rossiiskoi imperii (Norihiko Naganawa, D. M. Usmanova, Mami Hamamoto, eds., *Volgo-Ural'skii region v imperskom prostranstve: XVIII-XX vv.*, 198-229, Moscow: Vostochnaia Literatura) ㊦ 3 著書 ▼ (D. M. Usmanova, Mami Hamamoto と共編著) *Volgo-Ural'skii region v imperskom prostranstve: XVIII-XX vv.*, 343 (Moscow: Vostochnaia Literatura) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Who Were Tatar Intellectuals? A Reappraisal in the Contexts of the Russian Empire, Islamic World, and Local Politics, The Formation of National Intellectuals and the Development of University Network in the Regions under the Rule of Russian Empire at Finnish Literature Society, Helsinki (2011.3.14) ▼ Russia's Muslim Mediators in Arabia, 1890s-1930s: Some Thoughts on a Research Agenda, Muslim Identities and Imperial Spaces: Networks, Mobility, and the Geopolitics of Empire and Nation (1600-2011), Center for Russian, East European, and Eurasian Studies, Stanford University (2011.4.7)

中村唯史 ㊦ 1 学術論文 ▼ 境界をめぐる思考: 近代ロシア文学のコーカサス・イメーजीトルストイ『コサック』を中心に (『ヨーロッパ・グローバル化と諸文化圏の変容 IV』210-220, 東北学院大学オープン・リサーチ・センター) ▼ トルストイ『戦争と平和』における「崇高」の問題 『山形大学人文学部研究年報』8:113-143 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ ことばの杜へ (野間宏『暗い絵』(2011.4.16); 梅崎春生『いなびかり』(2011.6.11); 太宰治『新樹の言葉』(2011.8.6); オリガ・ベルゴリツ『昼の星』(2011.10.1); 室生犀星『雪くる前』(2011.11.26) 『山形新聞』 ▼ (図書紹介) オレスト・

ソモフ著『ソモフの妖怪物語』(2011.8.16); ピクトル・ベレーピン『恐怖の兜』(2011.10.18) 『ロシアNOW』 №3 著書 ▼ (編著) *Лев Толстой: сквозь рубежи и межи*, 87 (SRC) №4 その他業績 (著書形式)

▼「ソ連文学」史の書き替え: 帰還、奪冠、揺らぎ (野中進、三浦清美、ヴァレリー・グレチュコ、井上まどか編『ロシア文化の方舟: ソ連崩壊から二〇年』112-120, 東洋書店) №5 学会報告・学術講演

▼ Восприятие Л. Толстого «натуралистической школой» Японии, Россия и Япония: гуманитарные исследования, Дальневосточный федеральный университет, Владивосток (2011.9.9) ▼ソ連文学の一底流について, 日本ロシア文学会第61回研究発表会ワークショップ「いま、ソ連文学を読み直すとは」, 慶應義塾大学 (2011.10.9) ▼ Заполнить «небо над Аустерлицем»: взгляд М. Бахтина на Л. Толстого, «Жизнь сердца»: дух-душа-тело и Я – Ты отношение в русской литературе и культуре XX-XXI веков в европейском контексте, Maria Curie-Skłodowska University, Lublin, Poland (2011.11.18)

▼日本マンガの構造的なめぐり: その興隆と衰退, 山形市立図書館市民講座 (2011.1.30) ▼ (「ロシア文学映画館シリーズ」解説) 『リア王』(2011.1.28); 『オプローモフの生涯より』(2011.2.25); 『愛の奴隷』(2011.5.19); 『落葉』(2011.6.17); 『エルミタージュ幻想』(2011.7.22); 『孤独な声』(2011.9.2); 『ロマノフ王朝の最期』(2011.9.30); 『モスクワは涙を信じない』(2011.10.27); 『ストーカー』(2011.12.2), フォーラム山形 ▼浜田広介の再話について: トルストイ童話を中心に, 第7回ひろすけ童話学会, 浜田広介記念館 (2011.8.20) ▼「アウステルリッツの空」をめぐって: 『戦争と平和』における自然・死・歴史, 日本トルストイ協会第16回総会, 昭和女子大学 (2011.9.24) ▼映画に見るロシア・ソ連の20世紀, かほく町民大学ひなカレッジ「シネマ学」, 河北町どんがホール (2011.12.17)

野町素己 №1 学術論文 ▼ (Bernd Heine と) On Predicting Contact-induced Grammatical Change: Evidence from Slavic Languages, *Journal of Historical Linguistics*, 1:48-76 ▼スロヴェニア語の構文「dobiti + 受動過去分詞」について: 文法化の観点からの分析と試論『西スラヴ学論集』14:26-47 ▼From Possession to Passive: The Slovenian Recipient Passive through the Prism of Grammaticalization Theory (NOMACHI Motoki, ed., *The Grammar of Possessivity in South Slavic Languages: Synchronic and Diachronic Perspectives* [Slavic Eurasian Studies no. 24], 55-81, SRC) №2 その他業績 (論文形式) (5) その他

▼Kondolencje z Japonii, *Pomerania*, 15 (2011.5) ▼Wspomnienie o Wojciechu Kiedrowskim, *Pomerania*, 39-45 (2011.9) ▼知られざる境界のスラヴ語「西ポレシエ語」について『スラブ研究センターニュース』124:14-17 ▼セルビア科学芸術アカデミー会員ミルカ・イヴィッチ (1923-2011) のご逝去を悼む『スラブ研究センターニュース』126:16-19 №3 著書 ▼ (編書) *Grammaticalization in Slavic Languages: From Areal and Typological Perspectives* [Slavic Eurasian Studies No. 23 (改定増補版)], 121 (SRC) ▼ (編書) *The Grammar of Possessivity in South Slavic Languages: Synchronic and Diachronic Perspectives* [Slavic Eurasian Studies No. 24], 139 (SRC) №5 学会報告・学術講演 ▼Three Perfect Forms of Kashubian and Their Mutual Relations, British Association for Slavonic and East European Studies Conference 2011, ケンブリッジ大学 (2011.4) ▼How Many Perfects Does Kashubian Have?, The 6th Meeting of the Slavic Linguistics Society, エクサンプロヴァンス大学, フランス (2011.9) ▼ (Bernd Heine と) On Contact Induced Grammaticalization: Internally or Externally Induced?, Shared Grammaticalization in the Transeurasian Languages, ルーヴェン大学, ベルギー (2011.9) ▼Языковой контакт и грамматикализация залоговой конструкции (на материале кашубского и других славянских языков), *Grammaticalization and Lexicalization in Slavic Languages*, SRC, 札幌 (2011.11.13) ▼Moja droga kaszubska, *Гданьск* 大学, ポーランド (2011.5)

福田宏 №2 その他業績 (論文形式) (4) 翻訳 ▼ (監訳) カーステン・ウニギン著「欧州における国境の撤廃と再確定: デンマーク=スウェーデン国境地域における国際協力」『境界研究』2:133-147 №5 学会報告・学術講演 ▼社会ダーウィニズムとドヴォジャーク: チェコ社会における音楽の「進歩」と「退化」, 日本音楽学会, 東京大学 (2011.11.6) ▼Central Europe as a Shifting Zone: “Nostalgia” for Habsburg Monarchy and Sovereign States in the Interwar Period, Border Regions in Transition (BRIT) 11th Conference, Geneva (2011.9.7) ▼ハプスブルク帝国末期の連邦再編論と民族自決, 小シンポジウム「第一次大戦と帝国の遺産」, 日本西洋史学会, 日本大学 (2011.5.15) ▼Imagination for Borderlands: Czech Nation-Building and Body Culture in 19th Century, Western Social Science Association: 53rd Annual Conference (Association for Borderland Studies), Salt Lake City (2011.4.16)

藤森信吉 №2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ワルシャワ東方研究所訪問記: もはや社会主義後ではない『スラブ研究センターニュース』127:19-21 №5 学会報告・学術講演 ▼Border in Eurasia-A case of Transdnistria, Western Social Science Association: 53rd Annual Conference (Association for Borderland Studies), Salt Lake City (2011.4.9) ▼Borders Can Make Money? Trade between the

Unrecognized State Pridnestrovie and Sovereign States, Border Regions in Transition (BRIT) 11th Conference, Geneva (2011.9.7)

麓慎一 ㊦ 1 学術論文 ▼報效義会のシムシュ島への移住とシコタン島のアイヌ帰還問題『新潟大学教育学部紀要』4(1):41-50 ▼Japan and Russian Far East Area in the Japan-Russia Postwar Period (『ロシア極東における国際関係の諸問題：歴史と現代』68-72, ロシア極東人文大学 ▼近世後期における余地場所の請負について『余市水産博物館研究報告』14:47-49

松里公孝 ㊦ 1 学術論文 ▼Disintegrated Semi-presidentialism and Parliamentary Oligarchy in Post-Orange Ukraine (Robert Elgie, Sophia Moestrup and Yu-Shan Wu, eds., *Semi-presidentialism and Democracy*, 192-209, Palgrave/Macmillan) ▼Transnational Minorities Challenging the Interstate System: Mingrelians, Armenians, and Muslims in and around Abkhazia, *Nationalities Papers*, 39(5):811-831

▼Due modelli di autoritarismo. Russia e Cina, *il Mulino: Rivista bimestrale di cultura e di politica*, 5:837-843

▼Intra-bureaucratic Debate on the Institution of Russian Governors-general in the Mid-nineteenth Century (UYAMA Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts*, 83-101, London: Routledge) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼「西ベンガルの地方都市にて」「国際・政治学会 (IPSA) と欧州政治研究コンソーシアム (ECPR) の合同コンフェレンス」「民族研究協会 (ASN) の年次大会に参加して」『スラブ研究センターニュース』125:17-21; 24-27; 27-28

㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼Competitive Authoritarianism and Its Peculiar Substitute: Russia and China, IPSA-ECPR Joint Conference, "Whatever Happened to North-South," University of Sao Paulo (2011.2.16-19) ▼Faith or Tradition: The Armenian Apostolic Church and Community-Building in Armenia and Nagorny Karabakh, ASN 16th Annual Convention, Columbia University (2011.4.14-16)

▼Типология управления мусульманами в неарабских перифериях: Турция, Россия, Индия и Китай, 3rd East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, Beijing (2011.8.27-28) ▼Столыпинская реформа и формирование инфраструктуры тотальной войны в российской деревне, International Conference, "П.А.Столыпин и исторический опыт реформ в России (к 100-летию со дня гибели П.А.Столыпина)," (2011.9.28-30) ▼"No Winner, No Loser": The Joint Control Commission and Russia's Policies Towards South Ossetia and Abkhazia: 1991-2008, ASEES 43rd Annual Convention, Washington DC (2011.11.17-20)

望月哲男 ㊦ 1 学術論文 ▼19世紀ロシア文学のヴォルガ表象：アポロン・グリゴリエフ『ヴォルガをさかのぼって』を中心に『境界研究』2:65-83 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼武藤洋二著『天職の運命：スターリンの夜を生きた芸術家たち』(みすず書房, 2011)『北海道新聞(朝刊)』14(2011.4.3)

▼オーランド・ファイズ著 (染谷徹訳)『囁きと密告：スターリン時代の家族の歴史(上・下)』(白水社, 2011)『北海道新聞(朝刊)』15(2011.8.7) (4) 翻訳 ▼(松下隆志と)ウラジーミル・ソローキン著『青脂』(部分訳3最終)『早稲田文学』4:457-569 ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ヴォルガとロシア文学 (1850年代文人調査旅行を中心に), 現代ロシア文学研究/ヴォルガ文化研究 合同研究会, スラブ研究センター (2011.3.6) ▼『アンナ・カレーニナ』の文章について, 日本トルストイ協会, 昭和女子大学 (2011.3.26) ▼ロシア文学と境界, 北大博物館土曜セミナー (2011.5.21) ▼Nonviolence by Tolstoy & Gandhi: Toward a Comparison through Criticism, Conference "Comparative Aspects on Culture and Religion: India, Russia, China," Bangalore, India (2011.9.15) ▼Тень иезуита в русской литературе: казуистика в «Братьях Карамазовых», SRC, Sapporo (2011.10.6) ▼ロシア水辺文人調査旅行と南方表象, 中村唯史科研研究会「近代以降のロシア文化における『南方』表象の総合的研究」東京大学 (2011.11.26)

会 議 (2012年2月～3月)

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2011年度第3回 3月1日(持ち回り)

議題

1. 2012年度 GCOE 共同研究員の選考について

◆ センター協議員会 ◆

2011年度第5回 2月23日

- 議題
1. センター長の辞任について
 2. 次期センター長候補者の選考について
 3. 助教の辞職について
 4. 特任助教の採用について
 5. 2012年度客員教授・准教授の選考について
 6. 2012年度非常勤研究員の選考について
 7. その他

2011年度第6回 3月13日(持ち回り)

- 議題
1. センター教員の所属部門変更について

みせらねあ

◆ 田畑教授が北大ヘルシンキオフィスの初代所長に就任 ◆

北海道大学は、留学生の増大、学生の海外派遣の促進、海外の大学との研究交流の強化などを目的として、北京(2006年)とソウル(2011年)に海外オフィスを設けました。この4月1日にヘルシンキに3つ目のオフィスが開設され、その初代の所長にセンターの田畑教授が就任しました。普段は、フィンランド人の副所長が勤務しています。ヘルシンキオフィスは、ヘルシンキ大学内に設けられていますが、フィンランドだけでなく、ロシアを含むヨーロッパ諸国の大学と北大との交流強化を目指すと言われております。開所式は6月1日におこなわれる予定です。オフィスの住所等は以下のとおりです。[編集部]

住所: Fabianinkatu 26, 00100, Helsinki, Finland

電話: 358-44-7575135 Eメール: helsinki_office@oia.hokudai.ac.jp

◆ センターの役割分担 ◆

2012年度のセンター研究部専任教員の役割分担は、下記の通りです。[望月]

センター長	宇山
副センター長	望月
拠点運営委員	宇山/望月/田畑/岩下/家田

【学内委員会等】

教育研究評議会、部局長等連絡会議	宇山
教務委員会	宇山
図書館委員会	望月
情報ネットワークシステム学内共同利用委員会	山村
競争的資金にかかわる委員会	家田
創成研究機構運営委員会/連絡会議	宇山
低温科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員	宇山
社会科学実験研究センター運営委員	山村
アイヌ・先住民研究センター運営委員会	岩下
オホーツク環境ネットワーク	田畑
全学運用教員審査会委員	宇山

情報基盤センター協議員	山村
利益相反委員会	家田
知財法委員会	家田
情報セキュリティ委員会	松里
環境負荷低減推進員	田畑
男女共同参画企画調査専門委員	山村
ヘルシンキ・オフィス長	田畑

【学外委員等】

国立大学附置研究所・センター長会議	宇山
ICCEES 日本代表	松里
JCREES 事務局長	宇山
地域研究コンソーシアム理事	宇山
地域研究コンソーシアム運営委員	家田／野町
京都大学地域研究統合情報センター拠点運営委員	岩下
京都大学東南アジア研究所拠点運営委員	家田
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員	岩下

【センター内部の分担】

大学院講座主任	家田	Ryazantsev (2012.6.1-10.31)	田畑
教務委員	長縄	Weeks (2012.6.1-10.31)	ウルフ
入試委員	山村	Zhdanov (2012.11.1-2013.3.31)	松里
将来構想	望月／田畑／松里／岩下	Blyumbaum (2012.11.1-2013.3.31)	望月
総合特別演習(金曜)担当 ..(前期) 田畑/(後期) 望月		Pang (2012.11.1-2013.3.31)	岩下
全学教育科目責任者	長縄	鈴川・中村基金	望月
全学教育科目総合講義	岩下	日本人客員研究員	山村
全学教育科目演習	長縄	公開講座	家田
点検評価	松里／田畑／野町	専任研究員セミナー	家田
夏期シンポ (7月)	松里	雑誌編集委員会	長縄／野町
冬期シンポ (1月)	田畑		望月／松里／ウルフ
GCOE 冬期シンポ	岩下	欧文雑誌	松里／野町／ウルフ
図書	望月	和文雑誌	長縄
情報	岩下	スラブ・ユーラシア叢書	田畑
予算	田畑	ニューズレター和文	家田／(宇山)
外国人プログラム FVFP	松里	ニューズレター欧文	ウルフ／(岩下)
Round (2012.6.1-10.31)	山村		

◆ 人物往来 ◆

ニュース 128 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[望月／大須賀]

- 1月26日 Vlad Cubreacov (ルーマニア・モルドヴァ)
- 2月4日 植田暁 (東京大・院)
- 2月6日 古宮路子 (東京大・院)
- 2月14日 Antonida Akimova (サハリン国立大・院、ロシア)
- 2月15日 平野恵美子 (筑波大)
- 2月17-18日 Irina Mel'nikova (同志社大)、Natal'ia Potapova (サハリン国立大、ロシア)、阿部賢一 (立教大)、有信優子 (同志社大)、諫早勇一 (同志社大)、宮川絹代 (東京大)
- 2月20日 平田武 (東北大)
- 2月22日 Matthew Light (トロント大、カナダ)

- 2月27日 Chalapurath Chandrasekhar (ジャワハルラル・ネルー大、インド)、Rukmani Gupta (インド防衛研究所)、Christopher Len (安全保障開発政策研究所、スウェーデン)、LI Zejian (東京大)、Arun Mohanty (ジャワハルラル・ネルー大、インド)、Sanjay Pandey (ジャワハルラル・ネルー大)、H. S. Prabhakar (同)、Nandan Unnikrishnan (オブザーバーリサーチ基金、インド)、Kulbhushan Warikoo (ジャワハルラル・ネルー大、インド)、YANG Cheng (華東師範大、中国)、ZHAO Gancheng (上海国際問題研究院、中国)、安達祐子 (上智大)、石井明 (東京大)、上垣彰 (西南学院大)、小川伸一 (立命館アジア太平洋大)、片原栄一 (防衛研究所)、中居良文 (学習院大)、長尾賢 (同)、兵頭慎治 (防衛研究所)、吉田修 (広島大)
- 2月28-29日 貝澤哉 (早稲田大)、坂庭敦史 (早稲田大)、下里俊行 (上越教育大)、渡辺圭 (千葉大)
- 2月29日~ 麻田雅文 (日本学術振興会)、荒井幸康、石野裕子 (津田塾大)、岩間春芽 (京都大・院)、篠
- 3月1日 置理子 (東京外国語大・院)、須永恵美子 (京都大・院)、高田洋平 (京都大)、中村真 (大阪大)、浜由樹子 (津田塾大)、安田慎 (京都大)
- 3月2日 Engsens Ho (デューク大、米国)
- 3月3-4日 Tsyplma Darieva (筑波大)、井上貴子 (大東文化大)、大倉忠人 (法政大・院)、大森滋樹 (ミステリ評論家)、岡光信子 (東北大)、久野康彦 (東京大)、小林宏至 (首都大学東京)、杉本良男、高山陽子 (亜細亜大)、田村容子 (福井大)、常田夕美子 (大阪大)、鳥山祐介 (千葉大)、波多野健 (ミステリ評論家)、前島訓子 (名古屋大)、村田雄二郎 (東京大)
- 3月5日 Elizaveta Chupikova (極東連邦大学学部生、ウラジオストク、ロシア)、Elena Merezhko (極東連邦大、ウラジオストク、ロシア)、Aleksandr Meshcheriakov (ロシア国立人文大)、Anna Mironova (ロシア科学アカデミーシベリア支部大学院生、ウランウデ、ロシア)、Sergei Ponomarchuk (北東国立大、マガダン、ロシア)、Stepan Rodin (ロシア国立人文大)、Ekaterina Saenko (オレンブルグ国立大、ロシア)、Elena Sycheva (モスクワ国立国際関係大学学部生、ロシア)、Anna Viazemskaia (モスクワ国立法律アカデミー大・院、ロシア)
- 3月8日 大須賀史和 (横浜国立大)
- 3月13日 Ray Taras (米国)、木寺律子 (同志社大)、横手慎二 (慶応大)
- 3月15-16日 阿部賢一 (立教大)、小椋彩 (東京大)、金沢文緒 (学振特別研究員)、加藤有子 (東京大)、清沢紫織 (筑波大)、久山宏一 (東京外国語大)、田中壮泰 (立命館大)、西成彦 (立命館大)
- 4月7日 Mikhail Malko (ベラルーシ科学アカデミー)、Yevgeniya Stepanova (ウクライナ国立放射線医学研究所)、今中哲二 (京都大)
- 4月11日 Rickie Solinger (米国)
- 4月13日 松本ますみ (敬和学園大)
- 4月19日 Johan van der Auwera (アントワープ大、ベルギー)
- 4月28日 S. Anandhi (マドラス開発研究所、インド)、石田英明 (大東文化大)、井上貴子 (大東文化大)、宮本万里 (大阪大)
- 5月8日 山崎孝史 (大阪市立大)

◆ 研究員消息 ◆

ウルフ・ディビッド研究員は2月7～17日の間、科学研究費研究に関する資料収集及び研究打合せのため、米国に出張。また、2月20日～3月4日の間、科学研究費研究に関する資料収集のため、ロシアに出張。また、3月21～29日の間、科学研究費研究に関する資料調査のため、米国に出張。

松里公孝研究員は3月7～30日の間、新学術領域研究第2班「エリート、ガバナンス、政治的亀裂、価値」に関する選挙調査及び資料収集のため、ロシアに出張。

岩下明裕研究員は3月9～15日の間、新学術領域研究第1班「国際秩序の再編」に関する研究打合せのため、米国に出張。

野町素己研究員は3月22日～9月15日まで米国シカゴ大学にて在外研究。

家田修研究員は3月24日～30日の間、GCOE「境界研究の拠点形成」に関する調査のため、ハンガリーに出張。

3月は別れの季節、センター内で大小いくつかの送別会が行われました。



全体の送別会で、花束を渡された方たち



修士課程を終え、モスクワに旅立つN君を
励ますフライドチキンの会



ひな祭りパーティを兼ねた図書室職員の送別会

エッセイ	松里公孝	日本正教会見聞録	p. 15
	T. クジオ	スラブ研究センターと冬の札幌での5ヵ月	p. 19
	M. ジャガリヤン	日出ずる国の魅力：礼儀・茶道・書道など	p. 21
	石黒太祐	研究室を去り、社会で生き抜くために	p. 25
	野口健太	2年間の激闘	p. 26

2012年5月25日発行

編集責任 大須賀みか
編集協力 家田修
発行者 宇山智彦
発行所 北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>